ありがちPrologue、またの名をテンプレ話

唐笠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ありがちＰｒｏｌｏｇｕｅ、またの名をテンプレ話

【Ｎコード】
Ｎ５３３０Ｗ

【作者名】
唐笠

【あらすじ】
読み専の自分が何となく投稿するチート転生系小説。内容はネタ、文章は出来るだけ真面目に試行錯誤しながら、つまりネタ習作。何分初心者なので感想、意見等はお手柔らかにお願いします。

念の為、本文中に書いた実在する人物名は伏せ字にしています。

第零話　原点（前書き）

導入部分はテンプレ通り。

第零話　原点

「…点数？」

彼は今、上に黄金色の輪を浮かべた頭を傾げながら、手に持ったＡ４用紙に書かれた内容を読んでいた。

黄金色の輪――の時点で気付いただろうが、彼は既に死んでいる。死因は溺死。川で溺れていた少女を助けた後に力尽き、そのまま流された為だ。

その日の川は前日に降った雨の影響で流れが速く、元々底が深かったのも大きな要因でもあった。

彼自身、水泳は得意であったが、あくまでもそれはプールでの話しだ。

同じく水泳を嗜む人なら判るであろう。プールで泳げる事と海や川で泳げる事は違う、と。

例えるならば一般的で言うプールとは只の溜池の様なものだ。そういった設備が無い限り、水流等の人の泳ぎに対する抵抗力はほぼ無い。

その一方で、海や川はそれが顕著だ。海は時化の時に、川は場所にも依るが普段から流れが強い。当然、泳いだ際の体力の消費率には倍の差がある訳だ。

結局のところ、少女が溺れているという事実に焦燥し、状況判断を誤った彼のミスだ。

少女については無事救助出来たが、彼自身は川から這い上がる力すら残っていなかった。彼に向かって手を伸ばす通りすがりの人々

を他所に、やがて黄土色の激流に飲まれていった。

彼はその時の光景を、肺が水で満たされる時の苦しさ、死の間際の身体の痙攣すら、しっかりと記憶していた。　苦しい死に方ランキングのトップに入る死因を味わった本人曰く――どうせなら苦痛を感じずに死にたかった。

「…合計得点７８０点……って高いのか？」

死んだ後、何も無い辺り真っ白な場所で目が覚めた彼は何もする気が起きず、取り敢えず寝た。今持っている紙はそんな熟睡中の彼の顔にヒラヒラと落ちてきたもの。それに書かれていた内容はこうだ。

“貴方は転生資格を持っています。善行得点を好きな能力に振り分けて、好きな世界を選択して下さい。終わり次第、転生を開始します”である。

彼は生前、不特定多数の人間から見ても、普通に善人であった。ゴミのポイ捨ては許さず、道端にゴミを見付ければ拾い、正規の場所まで捨てに行く。困っている人がいれば声を掛ける、手伝う。常日頃から周りに気を使う。不良同士の喧嘩も止める。善人としての必要最低限の要素は勿論、それ以上の事すら行うのだ。

そして自分の能力が伴えさえすれば、命の危機に瀕している人がいれば即座に助ける。今回はそれを見誤った結果だが。

現代では類を見ない、有り得ないぐらいの善人だ。某正義の味方と同格とは言わないが、それを彷彿とさせる程に。

だが当の本人はそう思っていない。普通の感性、自分はそれに従ったただけだ、と言う。

普通とは何か。突出した才能や能力を持たないもの、平凡、平均、などが思い浮かぶだろう。

ならば世間一般で言う普通ではどうか。

例えば駅のホームで泥酔状態で爆睡している中年男性がいたとする。それを見た人々はどうするか。

恐らくはほぼ全ての人が見て見ぬフリをするだろう。駅員が気付くのを期待して放って置くだろう。

果たしてそれは普通の行動と言えるか。否、それは只多数の人々が互いに互いの行動に便乗しているに過ぎない。

普通ならば思い浮かばないだろうか。ここで男性が寝ると皆の迷惑になるのでは、このまま放って置けば風邪を引いてしまうのでは、そう思い浮かばないだろうか。　ならば男性を起こし、駅員さんに引き渡すか、帰り道まで導いてやれば良い。それが人として最善であり、最良の行動だ。

そうなのだが――それは総じて面倒だ。

もしかしたら男性は逆ギレし、怒鳴り散らして来るかもしれない。酔った勢いで絡まれるかもしれない。そんな可能性を孕む行動を誰が好んで取るものか。

だが彼はきっと男性に声を掛けるだろう。

面倒な事になるかもしれない、こちらが損をするかもしれない。だがそれはそれ。自然と頭に浮かんだ考えをそのままにせず、それ

を実行に移すだけだと。

普通とは尊いものだ。とは彼の父親の言葉だ。

世の中皆が皆普通か、そうでは無い。ならば変かと言われれば、そうでも無い。そんな微妙なバランスで、人々は成り立っている。

学校中の生徒や教師、会社中の社員や上司、身近な人間達を見渡してみよう。普通とは思った以上に少ないものなのだ。

普通とはある意味では完璧の一つの形。何もかもが出来て欠点の無い“完璧”と、特筆すべき点は無いがそれと言って問題も無い“普通”は対等と言える。そんな父親の言葉を信じ、彼は生きて来た。

その生き方はきっと転生後も変わらないだろう。苦笑しながら、彼は足元に落ちていた羽ペンで、用紙の記入を開始する。

まずは頭脳欄。

「何々……某スカ山並、某ウサギ頭並、某ラノベ使い魔並……って何コレ知らない単語ばっかり、つーか選択肢多過ぎ」

彼自身は漫画を少々嗜む程度で、アニメやライトノベルなどは余り馴染みは薄い。故に用紙に書かれた欄の殆どが理解不能だった。

仕方無く最後の欄にある、“若い脳の状態キープ”の欄にチェックを入れ、必要得点を持ち点から引く。ちなみに５０点だ。

「次に肉体欄は……某宇宙戦闘民族、真祖の吸血鬼、常時ギャグ補正……だから知らないってば…。ああ、鋼皮（イエロ）は判るな、ＢＬＥＡＣＨか」

彼は知らないが、この紙を作ったのは手違いの多い神様（笑）と

同類であったりする。

最後の単語は最近読んだ漫画に出ていたので理解した。だが大体にしてこの用紙に書かれた内容を信用しきっていない彼は、それらの欄を選ぶ気にもならず、最後の“好きなアクションスター並”にチェックする。ちなみに必要得点は３０点で、好きな俳優はジェ〇ソン・ス〇イサムである。

その後も容姿欄や声質欄、揚げ句の果てには性格欄まであったが、彼はこれら全てを必要得点5点の“従来通り”にチェックした。

理由は必要得点が少ないのも一つであるが、やはり記憶を引き継いだ転生となるならば、自分は自分のままが良かったという思いが強かったからである。

彼の見た目は決して良くは無かった。だが親から貰った顔を好き勝手に歪めるなど言語道断、罰当たりだし究極の親不孝である。そう考えた彼にとって、この選択は当たり前だった。

何時の時代も、親は大事にすべきなのだから。

「最後は…能力欄？つまりエスパーみたいなやつか？」

そして最後はチート好きは集まれ能力欄。これまた知らない単語のオンパレードで、彼は思わず溜め息が零れた。

「王の財宝、無限の剣製、念能力、ベクトル操作、魔力ＳＳＳランクオーバー、才能ＥＸ……もうヤダ…」

結局、最後の最後も一番下の“その他、欲しい能力を書いてください”の欄に適当に記入したのだった。しかも特に欲しい能力が無

かったので、ジェイソン・ステイサム繋がりのアクション映画系統のネタで。

「…こんなもんかな」

全ての欄を埋めた彼は不意に用紙の裏に何かを書き始める。

斜め左上に“その他項目”、その下に“両親にゴメンナサイ、今まで有難う、と伝えて下さい”とありもしない枠を勝手に書いたのだった。

『転生を開始します、ご注意下さい』

書き終わると同時に、頭の中にエレベーターガール宜しい声が響く。

「……」

もはや突っ込む気力が失せた彼は、転生処理をしているのだろう自分の身体が全て消えるまで沈黙を貫いたのだった。

彼が消えた跡、そこには先程の用紙が落ちていた。

それに近付く影が一つ。

「…裏面のはオマケにしといてやるか…」

子供、青年、老人とも取れない声で、影は言った。

「まあ…面白くなりそうだ…」

くっくっくっ、という笑い声が、白の支配する世界に木霊した。

、

第零話　原点（後書き）

さて、どうしようか。

第壱話　力には力が引き寄せられる（前書き）

書いてみて始めて理解する書く側の大変さ。今まで色んな作品を読んできただけに、自分の文章力の程度に泣いた。

これが初投稿する人の気持ちなのだろうか…。

第壱話　力には力が引き寄せられる

カーテンの隙間から除く朝日に瞼を刺激され、彼は渋々ながら目覚めた。
それと同時にタチの悪い鈍痛がズンズンと足音を響かせながら頭の中を駆け回る。

自分の意識に曇りが掛かったかの様にぼやけ、覚醒がかなり遅い。平行感覚が上手く取れず、時折込み上げる吐き気に耐える。
何か対策を講じなければと脳に意識を向けるが、肝心の頭のモーターが回転していない。どうやら電力が足りないらしく、僅かに起動しては停止を繰り返し、真面に稼働出来ない。

つまる所――二日酔いだ。

「……きっつ…」

彼はベッドから上体を起こし、しつこく瞼を攻撃する日光を右手で遮る。

彼がこの世界へ転生してから既に約３０年が経過していた。
とは言っても元々の童顔を引き継いだ為か、外見はまだまだ２０代前半に見える。

だが以前とは決定的に違う要素もある。
結論から言えば、あの用紙に書いてあったのは本当だったのだ。
今の彼の体つきはあの有名アクションスターそのもの。しかも最後に書いた能力もしっかり得ており、彼が脱力していたり自然体で佇んでいようと、身に纏う空気に圧倒的な貫禄やオーラが滲み出す

様になっていたのだ。
それも尋常な代物ではなく、本気の一睨みですら人一人は軽く殺せるのではと錯覚する程に。

彼自身、まさか記憶を引き継いだままの転生とは思ってもいなかった。
享年２３歳の早過ぎる死。まだやり残した事もやりたかった事もあり、あの時は転生と言う魅力的な二文字に飛び付いてしまった。焦っていたのは認める、でなければあんな怪しい用紙に記入などする筈も無い。

彼は転生後、物心ついた時には孤児院で過ごしていた。その時点では未だ前世の記憶は無く、ごく普通の幼児だった。
何故自分が孤児になったのか、などという疑問は当然一歳や二歳の幼児の思考では興味も湧く筈も無く、普通に皆に混じって遊んだり、夜におねしょしたりと楽しく過ごしていた。

―――そんなこんなで幼稚園に通い始めた頃、彼はある日突然倒れて病院へ直行、意識不明のまま入院となった。
意識が回復した時には、今までのやんちゃ盛りな少年だった彼は消え去り、以前の彼の記憶が蘇っていた。則ち昏睡状態の期間に記憶のフィードバックが行われたらしい。

彼はその事実を周囲に秘匿した。異端児を見る目で見られない為でもあるが、今までの彼を好いてくれていた友達との関係を切りたくなかったからだ。
記憶は引き継いでいるにしても、考え方や性格はもはや別人と化し、則ち記憶の無かった頃の自分を、“彼”を自分が消したと言っても過言では無いのだから。

そのまま幼少期は演技の為、常日頃から頭の中を掘り起こす日々を過ごした。周囲の皆を騙しているという罪悪感が心を圧迫し、孤児院の中ですら演技を続けねばならない辛さは尋常なものではなかった。

歴代最年少のストレス性胃潰瘍発症者になるのでは、と錯覚した程だ。中身が２０歳以上でなかったら耐えられなかっただろう。

彼はやがて幼稚園を卒園し、小学校に入学した以降は身の振り方を変えた。

幼稚園児では流石に無いが、今の時代では小学生が妙に大人びていたりする例はごく稀にあった為、この年代ならばある程度自分を出し始めても問題無いと判断したからだ。

彼は歳を重ねる度に違和感の無いペースで自分自身を曝け出していった。

――――だがここで突如、問題点が浮上する。

小学校と言うやつは幼稚園と比べ、遠足などの外出行事を除いても外に出る機会が増える。後者は全てに置いて余りに幼いが為、保護者は一人での外出をほぼ許可しない。だがその一方、前者は良い子ならば親の言い分をある程度は聞き入れるし、自分本位ではあるが多少は考えて行動する年代だ。近くで遊び歩く位ならば容易に許可が下りる。

彼の住む孤児院の院長と世話係の職員は皆心配性で、しかも規律が厳しかったが故に、子供達の外出を同伴者無しでは絶対に許さなかった。流石に小学生となった子供達に対しては、その子の性格等に問題無ければさえ許可を出したが。

小学校へ進んだ彼はその多少大人びた立ち振る舞いからか、同級生達から頼られる存在となっており、暇さえあれば遊びに誘われる

事が非常に多かった。
教師陣からも普段からクラスの纏め役として見られ、信頼されていた。

小学生でありながら外出が圧倒的に多かった彼。その分何かしらの場面に遭遇する可能性も比例して増えていた。

魂レベルまで染み付いた性分は隠しきる事は出来ないものだ。途中途中でボロが出るのは仕方ない。
同級生数人と公園で遊んでいた時、道端で重い荷物を背負うお婆さんを発見すれば、皆を先導して手伝いに行く。一人の女の子を集団で虐める男の子達を見れば即座に割り込み、肉体的及び精神的に指導した。
そんな彼に影響されたのか、同級生達や指導された者達も自主的に善行に努める様になっていた。
結果、同級生のみならず、地方の小学校の生徒達まで束ねるボスの立場が出来上がっていたのには、彼自身も困惑していたが。

――――普段は不思議な空気を持つ平凡にしか見えない男子学生……そしてある時はどんな荒くれ者達も纏め上げ、善行を推進する皆のボス。
中学辺りから彼の存在が公になり始めた時の肩書きだ。

その頃からか、別段鍛えなくとも自然に肉体が進化して行く様になり、最後の能力欄による影響も大きく出て来ていた。
しかも年々変化する威圧感が拍車を掛けたらしい、血の気の多い連中に頻繁に絡まれる事が多くなり、応戦を余儀なくされた。
やれ調子こいてんじゃねぇ、目立つんじゃねぇ、良い子振るんじゃねぇ、などと絡む理由は幼稚そのものだったが。まあ若気の至りと言うやつだ。

当然楽に打ち負かしていたが、その度に許可もしない舎弟達が増えて行ったのは予想外だった。
肩書きにある、どんな荒くれ者達も纏め上げ…の部分はこの舎弟達の事だ。平凡な学生の後に不良達が追従する光景は異様の一言である。
だが戦いの場が多いせいか、能力の扱い方の練習に困らなかったのは思わぬ利点だが。

それらの行動が祟ったのか、高等部に上がる頃までに付けられたあだ名は優闘生(ゆうとうせい)。
それが世間に普及するのが非常に早く、普通の事をしていた筈なのに何故、と彼は陰で頭を抱えていたりする。
確かに普通の感性に従った行動ではあるのだが、それを行使する能力が異常であっただけだ。

それはもう――色々苦労した時代だった、と今の彼はしみじみ語る。
今では良い思い出だが。

「…コォォォォォ……フゥゥゥゥ…」

彼は腹を意識した深呼吸を数回行う。それだけで先程までの二日酔いが徐々に治ってゆく。

１９５７年に劉貴珍という人物が出版した、気功という言葉が大衆の間に定着するきっかけとなった本、気功療法実践。先程の呼吸法はこれに書かれている技術、内養功だ。

これも得た能力による恩恵である。

考えればこの能力、つくづく便利であった。戦闘に関しては勿論だが、ここまで幅広いものがあったのは嬉しい誤算だ。

映画で見た敵を倒すだけのイメージは所詮イメージだったと、そういう事である。

やがて完全回復した彼は寝巻のまま朝食を取り、シャワーを浴びた後仕事着のスーツに着替える。

一通りの朝の準備を終えた彼は家を出て仕事場へ向かう。とは言っても隣の小さな店がそれなので５０歩以下で直ぐ着く距離だが。

店のドアを開錠して店内へ入り、電気を点け、直ぐ傍に立て掛けてある看板を運び出して外へ設置。それに色取り取りのチョークで何かを書き始めた。

「十色シルクハット入荷しました…と」

彼は商品を宣伝する文章を丁寧に書き連ねていく。だがいかんせん、その対象商品の名を聞けば需要性が皆無であろう事実には想像がつく。

結局のところ、これは無駄な努力と言う訳だ。

普通の感性を重視する彼だが、唯一変だと思われるものがある。

それがこの妙なセンスであった。

「さて、本日開店と」

その店の名前は切干（きりぼし）雑貨店といった。

店主の名前は切干（きりぼし）　秋斗（あきと）。

麻帆良一番売れなくて過ごし易い雑貨屋と、ある意味有名な店であった。

切干雑貨店、本日も開店――――。

秋斗は定位置であるカウンターにて、時折緑茶を啜りながら、片手に持った在庫帳に目を通していた。

「うぬぅ…」

彼は記載された店の商品在庫を確認するや否や、思わず唸り声を上げながら眉を顰た。

理由は単純明快――在庫変動が先週からほぼ無いからだ。

まあ当たり前である。秋斗の斜め上を行くセンスで厳選した商品の侭くが外れに外れ、客のニーズに全く応えられてはいないのだ。

日本の何処にオオムカデの縫い包みを買う子供が居るのか。キッチンに製麺機を置く主婦が居るのか。半径３０センチの巨大水晶玉を買う占い師が居るのか。黒や白ならまだしも、十色のライン模様

のシルクハットを誰が欲しがると言うのか。
何事も普通にこなせる秋斗に絶対的に足りないモノ、それは商才だった。
彼は在庫帳を仕舞い、次に予算帳を取り出す。
「黒が少ない…」
だがそれでも辛うじて赤字になっていないのは奇跡に近い。
その理由はこの店で行っている副業の様なものにある。
それは読書喫茶スペース。この広めの店内の約半分も使い、本棚、テーブル、イス、ソファー、クッション、マッサージチェアなどが並んでおり、一時間２００円という破格の値段で自由に過ごせる場所なのだ。
勿論本棚に並ぶ書籍の種類も全て秋斗センスだ。一般的に書店に並ぶ様なものなどは一切無い。
――――だがこればかりは当たりだった。
本好きな客がその珍しさからか、頻繁に来店するのだ。しかも中には歴史的に価値のある書籍もあり、譲って欲しいと迫る客も少なく無い。
ちなみにこの店の売上げの約七割が、この読書喫茶スペースからきている。
こんな事ならば始めからそれ一本で通せば良いのではと言いたい。だが秋斗はその考えを頑なに拒んだ。

彼が前世でやりたかった事――それこそが雑貨屋の経営だったのだから。

「違う商品でも仕入れるか…」

――最終的に行き着く発想は駄目駄目であったが。

本日は土曜日。世間が基本的に休みの曜日であり、部活の無い学生達が外出する日だ。

それにも拘わらず、この店には未だ客足は無い。

どうやら今日はハズレの日らしい。

時間も昼を過ぎ、時計の針も午後の2時を差そうとした、そんな時だった。

静寂な店内に鳴り響くカウベルの音。秋斗ははっと顔を上げ、店の入口を見遣った。

本日最初のお客様だ。丁重におもてなししなければと、内心で気合いを入れる。

店は自らが仕入れた商品を提供するだけの場所ではない。お客様の意志を最優先に考え、要望に応えるのが店を経営する者としての責任なのだ。

どんなお客様でも良い、準備は万端だ。秋斗は堂々とした態度でカウンターの椅子に腰掛け、入口のドアを凝視した。

――だがその期待は儚くも散る。

「…相変わらず客の居ない廃れた店だな」

ソフトに彼の心を突き刺す台詞を吐きながら来店して来たのは、長めの金髪を靡かせた少女…ではなく幼女であった。
その後には翡翠色の髪をした無表情の、恐らく中学生ぐらいの少女が追従している。

まさかの見慣れた二つの顔に、秋斗はガックリと肩を落とした。

「…オイ貴様、今明らかに面倒な奴が来たと思っただろう」

「気のせいだよ」

「フン、どうだか」

実はこの金髪幼女、開店当初からの常連だ。だが常連“客”では無いのである、残念ながら。

翡翠色の髪の少女は少々前から金髪幼女に付いて来ていた。彼女と同じく買い物をしない為、秋斗の中では只の常連という括りではあるが。
だが本人は真面目な性格で、失礼な物言いをせしない分、まだ金髪幼女よりはマシだった。

秋斗は失意の溜息を吐き、視線を再び予算帳に移した。

「道楽じゃああるまいに…そんな事では客足も遠退くぞ、やって行けるのか？」

「…断言はしないケド、それに近いからね。別に構わないさ」

「…貴様の歳で道楽など、にわかには信じられんぞ。まあこちらと

しては雑音が少ない方が過ごし易いから良いがな」

金髪の幼女はニヤニヤとからかう様な笑みを浮かべながら、堂々とカウンターの目の前まで椅子を引っ張り出し、ドカンと座る。

そして視線をチラリと秋斗愛用の湯呑みに向け、本人に戻す。

それだけで秋斗は彼女が求めているものを理解した。

彼は肩を竦めながら、新たにカウンターの奥から色違いの湯呑みを取り出す。次にポットの湯を使って茶葉を浸し、一分経過した後に出来上がった緑茶を湯呑みへ注いで彼女に差し出す。

湯温は７０度付近、つまり入れたのは玉露だ。

金髪の幼女はその一連の動作を確認すると満足そうにニヤリと笑い、湯呑みを受け取った。

「ズズッ…まずまずだな…」

秋斗は自分の入れたお茶を美味そうに啜る彼女の姿を見ると、先程の失礼な台詞は許せてしまう。そんな事を考えながら、もう一つの湯呑みを新たに取り出し、同じくお茶を注ぐ。

差し出す相手は、先程から金髪幼女の斜め後ろに佇む少女。

「君もどうぞ」

「い…いえ私は…」

翡翠色の髪の少女は無表情ではあるが、些か焦った様に口ごもり、差し出された湯呑みを見遣る。

どうやらまた遠慮しているらしい。
彼女は前回も前々回も、そのずっと前からも同じ事をしている。
彼女も中々変わらないな、と秋斗は苦笑した。
彼女はそんな彼の様子から、困らせてしまったのかと勘違いしたらしい。
「い、いえ、秋斗さんのお茶が駄目だという訳では…ですから…その」
終いには更に焦り始めたらしい。
彼女は両手を忙しなく左右に振り、パクパクと口を開閉し続ける。
そんな様子を見せられれば逆にこちらが焦りたくなってくる。
「折角だ、飲め茶々丸」
その煮え切らない態度に痺れを切らしたのだろう。金髪幼女は彼女に対して命令した。
すると彼女はチラチラと秋斗の顔色を伺いながらも、静かに席に着いた。
「茶々丸君も相変わらずだね…」
「貴様のその緩み切った顔に似合わん空気もな」
秋斗は一々毒を吐く金髪幼女の態度に先程の感情が消え失せ、や

り返す事にした。

やはり学生時代から付き合いが長い分遠慮が無いのだろうか。だが今日は妙に刺がある。

何かあったのだろうか。気にはなるが、彼女が何時もの様に愚痴らないと言う事は、今回は余り踏み込むべきではない。

こういう時は互いに身体を動かし、すっきりした方がいい。秋はそう結論付けた。

「え婆もね」

「…おい貴様、何か違う感じがするぞ。エ、ヴァ、ン、ジェ、リ、ン、だ、復唱しろ」

「ん？え婆庵Ｊ臨」

ピキリ、と効果音が付きそうな程に、エヴァンジェリンのこめかみ付近に血管が浮き出る。

彼女の性格は秋斗が知る限りでは自己中心的だ。相手にやるのは良いが自分には駄目、といった子供の様な態度を取る事が良くある。

まあ見た目相応の態度かもしれないが、本人はもう中学生だ。そう、自分と同期でありながら、まだなのだ。

別に小学生と言っても過言では無い外見なのだが、時々達観した態度を取る事もあるので、確かに小学生レベルでは無いのは確実である。

では何故エヴァンジェリンは今だに中学生なのか。その疑問に関

しては、彼女自身から絶対に追求するな、と殺気混じりの視線で睨まれた為、秋斗はそれ以降考えるのを止めた。

「クックック…上等だぞ秋斗。その喧嘩買おう…」

秋斗の態度をひん曲がった解釈をしたらしい。

ユラリと椅子から立ち上がったエヴァンジェリンは、ご丁寧に湯呑みを空にした後、カウンターに乗り上げて仁王立ちになり、呆けた表情でこちらを見上げる男を逆に見下ろす。

こんな状況になる様に誘導したのが彼自身であり、計画通り、と内心でニヤリとほくそ笑んでいるのだとも知らずに。

「…良いよ」

「ほう？今日は随分と乗り気じゃないか」

いつもはのらりくらりと回避しようとする筈の秋斗。そんな彼が見せた潔さに、エヴァンジェリンは気分が高陽するのを隠せなかった。

今こそ、この眼前の男に積年の恨みを果たしてくれよう、と。

得体の知れない武術を使いこなし、最強の二文字を持つ自分に連敗という屈辱を味合わせてくれた、切干秋斗という男に。

一方で秋斗は彼女が何かの流派の武術を完璧に習得しているのは、今までの勝負の中で理解していた。普段の身の運びもそうだが、実際に初めて手合わせした時に、その恐ろしい程の強さを見せ付けられたからだ。

まあ彼の誇る神拳の前には赤子同然だったが。

取り敢えずその初めて手合わせ以降、エヴァンジェリンとの友人付き合いが始まった訳だが。
そうして事有るごとに彼女が純粋な武術での勝負を仕掛けて来るのは恒例となっていた。

秋斗は考える。自分と同期であれだけの腕だ。恐らく今まで積み重ねてきた修練は半端なものではない。
それがある時あっさり打ち崩されたのだ、さぞ悔しかったのだろう。何度敗れようとも諦めない彼女の姿勢、意地がそれを物語っている。

その事実が、反則技を使用している秋斗としては非常に心苦しかった。
そんな罪悪感から彼は長期化した今でも、彼女の勝負に付き合っているのだ。

「では表に出ろ秋斗。言って置くが二週間前の私とは大違いだ…」

「…へぇ」

エヴァンジェリンは自信溢れた表情で、ビシッと秋斗を指差す。

事実、彼女も反則的な道具を使い、いつもの何十倍の鍛練を行っていたりする。故にその態度は仕方ないと言えるだろう。

「あれから鍛練を重ねに重ねた私の技量に驚くがいい！」

「…と、その前に。」

「へ？」

秋斗は無い胸を張りながら踏ん反り返るエヴァンジェリンの足を手刀で払い、そのままカウンターから落下する彼女を横抱きに受け止める。

つまりはお姫様抱っこ、というやつだ。

「んなっ、離せ貴様！」

「じゃあバトルフィールドに移動しますか～」

秋斗はすっきりさせようとは思ったが、負ける気など更々無かった。

だからこそ、彼自身が一番得意とする場所へ移動を開始した。

何処へ向かうか見当が付いたのか、エヴァンジェリンは顔色を真っ青に染めた。

「ま、まさか貴様……“あそこ”で戦り合うつもりか…！？」

「オフコース」

エヴァンジェリンの質問に秋斗は非常に爽やかな笑顔で即答する。

———嵌められた。彼女はそう悟ったが、既に手遅れ。彼は歩みを止めない。

「よ、止せ秋斗。“あそこ”だけは…」

「はっはっは、御冗談を。じゃあ…逝こうか」

「い、いやあああぁぁぁぁ！！！」

秋斗は涙目で叫び声を上げるエヴァンジェリンを無視し、店の奥へと消えていった。

一人ポツンと残された茶々丸はと言うと。

「ジー…最高画質モード録画完了…」

エヴァンジェリンのあられも無い姿をちゃっかりカメラで録画、そのデータを内部メモリーへ厳重に記憶していた――――。

翌日、虚ろな目でブツブツと何かを呟き続ける金髪の幼女の姿が、麻帆良学園本校女子中等部内で目撃されたそうな。

それを知った麻帆良学園理事長、近衛近右衛門はその異常に長い頭を斜めに傾けていた。

「…何があったんじゃろう？」

「さ、さあ」

学園長の疑問の声に、スーツ姿に無精髭の男、タカミチ・T・高

畑が冷や汗を流しながら答えた。

「程々にしてくれよ…秋斗」

彼は天井を仰ぎながら、今此処には居ない誰かに懇願した。

、

第壱話　力には力が引き寄せられる（後書き）

たまにある行間の開きは適当です。本当は続けて書きたいのですが、携帯で見た時に何となく読みずらかった記憶があるのでこうしました。

ゆくゆくは適当などでなく、文章の流れを読んで開ける技量を身につけたい…。

第弐話　独壇場（前書き）

自分が今まで読んできた最強系小説で面白いと思った作品には共通した条件があります。

それはチートの割に余り無双しない事、焦らず淡々と話を進めて行く事ですね。

なので自分も出来るだけ余り無双させずに焦らす方向で行きたいと思います。ネタとは言え習作ですから、まずは挑戦。

…書けるだけの文章力があるならね。

、

第弐話　独壇場

既に日も沈み、辺りは真っ暗闇。だが空を見上げれば雲一つ無く、綺麗な満月が悠々と地上を照らしている。

切干秋斗は閉店準備の最中だった。
残念ながら今日は客は二人しか来店せず、タバコと駄菓子ぐらいしか売上げは無かった。
だが落ち込んでもいられない。秋斗は明日があるさ、と言わんばかりに前向きに掃除に取り組んだ。

気合いを入れ過ぎたせいか、彼のテンションは妙に最高潮だった。夜行性は２０代前半までだと言うのに。

満足がいく程度に店内を綺麗にした後、口笛を吹きながら外の看板を戻す為に外に出る。

カラフルなデザインで“本日のオススメは熊の手の着ぐるみ！！”と書かれた看板を持ち上げ、店内へ戻ろうとした――その瞬間。

「…よう、そこ兄ちゃん」

秋斗の背中に重低音でハスキー混じりの男の声が投げ掛けられた。

振り返れば、その声の主であろう者の異様な姿が目に入る。
上半身裸で赤い肌。丸太の様に太い腕に比例した巨大な身体。厳つい顔付きに、その額から突き出た角。
日本古来で言う赤鬼、それも三メートルはくだらない大きさのも

のが、背後に大量の部下を引き連れ、満月の眩しい夜空を背景に佇んでいた。

「その店…まだ開いとるか？」

赤鬼は右手に持った茨の如く刺が生えたこん棒を担ぐと、そう問う。

どうみても数百キロはしそうな得物だ。それを軽々と持ち上げる辺り、赤鬼が如何に豪腕かを物語っている。

だがテンションがハイになっている秋斗はその事など全く気にならず、上機嫌で返事を返した。

「いらっしゃい！何名様ですか？」

――――彼の返答に鬼達全員がずっこけた。

切干雑貨店、もう直ぐ閉店…。

――――魔法使い、と呼ばれる者達がこの麻帆良には古くから存在

している。

今現在も多数の魔法使い達が、この都市で生活している。

彼等が属している組織の名称は関東魔法協会。理事を務めるのは麻帆良学園理事長、名を近衛近右衛門と言う。

そんな彼等が住むだけあり、この土地には希少価値の高いものが山程ある。

まずは世界樹と呼ばれる世界でも類を見ない巨木。正式名称は神木・蟠桃（しんぼく・ばんとう）と言い、麻帆良学園の中央に悠然と聳え立っている。

これも麻帆良設立当時から存在していたとされている。

只歴史ある巨木なだけでは外部に狙われる要因にはならない。問題なのはその内部に強力な魔力を秘めている為である。

しかも22年に一度の周期でその魔力の蓄積量が最大となり、木を中心とした6箇所に強力な魔力溜まりを形成。それだけで飽き足らず、この魔力溜まりが周囲に居る人の心に作用、その者の願望を極めて高確率で叶えてしまうという現象を巻き起こすのだ。

だがこの魔力は即物的な願いは叶えない。その反面で告白に関する願いには成就率が十割を越すという良く解らないものとなっている。

最後はともかくとして、この世界樹は研究価値としては破格だ。故に世界の研究者、自らの目的の為に利用しようと企てる者が、傭兵やフリーの魔法使いを雇い、世界樹を確保する為に麻帆良に襲撃をかけたりするのだ。

無論全てがそうではない。中には野心云々は関係無く、魔法使いという人種を憎み、忌み嫌い、この土地から追放せんとする者達が

いる。

それはこの世界特有の呪術や妖術、剣術を受け継いだ者達が集い、この世界を古くから護り続けてきた京都に拠点を置く組織、関西呪術協会。その中の強硬派、または過激派と呼ばれる者達だ。

彼等の目から見れば、麻帆良という土地は異界と相違無い姿で映っている。

魔法使いに関しては、いきなりしゃしゃり出て来ては世界樹含む周辺の土地にいきなり拠点を置き、勝手な真似ばかりをする連中と言った認識だ。

――――正確に言えば、麻帆良に存在する魔法使い達はこの世界の住人ではない。原点は同じくこの世界だが、元々出生から生活を送っていた世界は別にある。

それは魔法世界（ムンドゥス・マギクス）。この世界、あちらでは旧世界（ムンドゥス・ウェトゥス）と呼ばれ、対になって存在するもう一つの世界である。

魔法世界では獣人や妖精などが存在し、魔法技術を基盤とした独自の文明が発達しており、それこそ典型的な異世界の例と同じだ。

世界の構成としては違いなど無く、地球と同様の現実的な世界で、総人口は人間・亜人合わせて約１２億人程だ。

この世界に地球から移住してきた人間、新しき民はメガロメセンブリア――旧世界の魔法使いの間では本国と呼ばれており、それを盟主とする北の連合、メセンブリーナ連合を。

先住の獣人ら古き民は南の帝国、ヘラス帝国を形成し共存している。

つまり地球人と異世界人、原点が同じなだけで全く違う人種なのだ。互いに持つ常識にも当然違いがある。

しかもかつて多数の人々を巻き込んだ大戦が勃発した歴史があり、その時の犠牲者が関西呪術協会関係から出ており、強硬派の者達が奮起する要因となっている。

確かに魔法使い側も強引な部分もあったのは事実。だが謝罪も賠償も十分しているし、現在も継続中だ。しかも互いに関係者複数を自らの土地へ受け入れたりと、歩み寄る姿勢も見せている。

――――だが人の感情とは理論では制する事は出来ない。大戦で両親を失った子供に、憎しみを抑えろと言ったところで聞き入れられる訳無いのだから。

しかも最近新たに関西呪術協会の長として就任した人物も問題だった。

近衛詠春、旧姓を青山。卓越した剣技を持ち、かの大戦で活躍した紅き翼（アラルブラ）と言うグループの元メンバー。

出生はこの世界で、京都神鳴流という剣術を修めており、修業と表して魔法世界へ赴いたのがきっかけで紅き翼へ加入した人物。

大戦で活躍という部分で理解出来たであろう。詠春より以前から関西呪術協会に属している強硬派の連中にとって、彼は魔法使い達と同類だ。

同じく京都神鳴流剣士達の中には、彼の事をこう表する者も少なくない。

――――我等の剣術を人斬りに使った裏切り者、と。

神鳴流は本来、人に仇を為す異形、妖怪や悪霊などを討つ事に長

けている。それと関西呪術協会の呪術師の前衛を務める事もしばし。
伝統を重んじる者達にとって、詠春の行為は許容範囲を越えるものだったのだろう。

詠春の理解者も居るには居るが、結局彼の就任後は組織内部で融和派と強硬派が別れ、今の状況に至る。

更に追い討ちを掛ける出来事も。
詠春に娘が生まれたのだ。しかもその子が他に類を見ない程の強大な魔力を持っていたのだからもう大変。

関西呪術協会はその名の通り呪術や式神に氣など、日本に古来より伝わるものを主流としている。
そして魔法に関する知識も無い訳ではなく、寧ろ魔力の運用知識も広く知られている。

則ち強硬派にとって、詠春の娘の利用価値は十分にあるのだ。
しかもその娘と婚姻を結べば、その者が関西の次期の長を継ぐ事が可能となる。目を付けない訳が無い。

まあ恐らく娘はそんな下心満載な相手など拒絶するだろうが、洗脳でも何でもすれば問題は無い。
正に外道の所業ではあるが、手段を選ばない強硬派はその事も一部視野に入れているのだ。

現在、その娘は中学生となった。しかも麻帆良学園在中である。
捻くれた見方をすれば、東の魔法使い達が西の長の娘を人質にしているとも取れなくも無い。

更にこの人物にも問題がある。現関東魔法協会理事長、近衛近右

衛門だ。
近衛家は関西呪術協会に属する家系だ。近右衛門はその様な身の上でありながらも、若くして近衛家を出て魔法世界にて魔法を修め、その組織の頭を張っている。
そんな彼は関西の一部及び強硬派からは裏切り者として見られている。
その様な人物が長を務める組織と仲良く出来るか、と彼等は語る。
――――関東魔法協会と関西呪術協会が完全に有効関係を築くのは一体何時になるのか。
そういった複雑かつ面倒な事情で、麻帆良は無意識の内に外部の敵を作りまくっている。
敵の中には、昼間の時間帯は普段の仕事の都合上なのかほぼ無いが、夜間に襲撃を仕掛けて来る者が非常に多い。
その迎撃には魔法使い達が出払ってはいるが、彼等の大半が教職を務めている為に、その疲労度は半端では無い。
朝から夕暮れまで教師の務めを果たし、夜間は遅くまで警備員の真似事をしなければならない。
――――労働基準も何もあったものか。普通ならば一ヶ月持たずに倒れる労働環境である。
身体に関しては治療、または体力を回復させる術が魔法にはあるが、精神的な部分はどうにも出来ない。学園長はその状況を重く見た。
致し方無く、腕の立つ魔法関係の生徒にも総動員してもらい、何

とか凌いでいるのが現状である。

だがしかし――今回の襲撃の規模は学園長の想定を遥かに越えていた。

「チッ…何だこの数の多さは」

もう三桁をに及ぶかといった数の鬼を始末したエヴァンジェリンはうんざりした表情を浮かべていた。

「…マスター、後方より更に敵性反応です。数はおよそ３０」

傍に控える茶々丸は冷淡に状況を伝え続ける。

麻帆良学園の戦力は言わば少数精鋭だ。並の実力者達が束になろうとも、一人一人を仕留める分には足りない。

だが数による持久戦に持ち込まれれば些か弱い。今の状況こそがそれだった。

「面倒だ、タカミチに任せる」

こちらの魔力も残り少ないしな、そう判断した彼女はその事をタカミチへ念話で伝える。

念話とは魔法使い達が多用する通信手段で、魔法を使えずとも僅かな魔力さえあれば使用可能な便利なものだ。覚え初めは集中が続かず、上手く伝わらない事が多いが、エヴァンジェリンの様な熟練者になれば普段の呼吸に等しく容易い。

念話を受けたタカミチは苦笑しながら、対応する。

「こっちも大変なんだけどね…出来るだけ早く済ませて向かうよ」

「ふん、さっさと来い。私の魔力はもうすぐ空になるぞ」

「ははっ、了解だよ」

この状況を苦笑程度で済ませる辺り、タカミチの実力の高さが窺える。

言う事を言ったエヴァンジェリンは念話を切り、未だ見えぬ敵に対して遠距離から魔法を撃ち込み始める。

押し付ける様な真似をしていながらも、自分のやるべき事をしっかり行う彼女は案外義理堅いらしい。

魔法の矢を打ち続け、丁度魔力が切れた辺り、茶々丸が初めて焦りの声を上げた。

「…マスター！！」

「どうした、茶々丸」

エヴァンジェリンは自らの従者の様子に、また新たに敵でも増えたかと考え、確認をとる。

そして返ってきた答えは予想通りであり、ある意味予想外だった。

「新たに敵性反応を確認、数は５０以上…」

「また、か…懲りない奴らだ」

「場所は…切干雑貨店周辺！間もなく到着します！！」

「…何だとぉ！？」

エヴァンジェリンは魔力切れにも拘わらず、茶々丸と二人でその場から全力で駆け出した。

顔から地面に激突した体勢から起き上がった鬼達は、漫才並にズレた返答をしてくれた人物を睨む様にして注視する。

見た限り、歳は２０程度だろう。身長は二メートル近くあり、装着しているスーツの張り具合から、体はかなり鍛えられている。

そして何より、その緩んだ表情に似合わぬ重々しい雰囲気。本人は隠しているらしいが、幾多の猛者達をその目で見て来た赤鬼には見破る事が出来た。

赤鬼はそれらの条件から、眼前の青年が裏の関係者であると勘違いした。

「兄ちゃん…わざわざ誤魔化さんとも解っちょるで」

確信を持った赤鬼が、鋭い眼光で目の前の青年を、切干秋斗を貫く。

嘘は許さん、とばかりに。

「さて、何の事ですかねぇ」

対する秋斗は全く動じない。

元々緩んだ表情を更に緩め、赤鬼の殺気混じりの視線を受け流し、気の抜けた口調で返す。

———正直言えば、彼の内心はかなり緊迫していた。

先程のテンションは既に鎮まっており、冷静に判断しても自分が今非常に危険な状況であるとしか考えられない。

如何にして切り抜けるべきか——仮面に被われた内側でそれを必死に探っていた。

少々本気で出した殺気すら流し、惚ける秋斗を見た赤鬼は怒るどころか、逆に笑みを浮かべる。

どうやら想定の内だったらしい。

「…へっ、儂らの姿見て軽口叩ける肝っ玉持っとる時点で丸分かりや」

担いだ金棒で肩をコンコンと叩き、赤鬼は言葉を繋ぐ。

秋斗は表情を緩めたままだが、身体は微動だにしていない。
その重心は何時、どの方向でも移動出来る様に構えられていた。
「兄ちゃんは“こっち側”の人間や。違うたぁ言わせんで」
「……」
彼は無言。それを赤鬼は肯定と取ったのか、口元を更に歪め、普通の笑みを好戦的で危険漂うものへと変える。
「こないな寂しい場所で細々店構えてるっちゅう訳は何となく解る。せやけどこっちも仕事やからな…」
「仕事…ですか」
「半分は趣味やがな……まあ悪く思わんでくれや」
赤鬼は金棒を肩から降ろした。それだけで彼に従う鬼、化生達は思い思いの得物を一斉に構え始める。
秋斗はそこで初めて緩んでいた表情を一変、完全な無表情とした。持っていた看板は邪魔だとばかりに横へ投げ捨てる。
その様子から、やっと戦る気になったかと赤鬼は期待に心を膨らませ、自分も金棒を構える。
———だが次の瞬間、その期待は見当違いだったのだと思い知らされる。
何故なら秋斗が一瞬で方向を後ろへ転換して駆け出し、店内へ逃げ去ったからだ。

突然の事に赤鬼含めてその部下達は硬直したが、数秒後に慌ててその後を追い始める。

「…って兄ちゃんそりゃ無いやろ！？」

赤鬼はツッコミと同時にドアを蹴破り、店内へ侵入する。それに追従し、部下達も次々に入り込んで行く。

その長身を利用して商品棚が立ち並ぶ店内を見渡しても青年の姿は見えない。

流石に怒りの湧いた赤鬼は感情に任せてその棚を金棒で叩き壊す。

綺麗に並べられていた筈の商品は床へ転がり、赤鬼はそれを軽く踏み潰した。

するとカウンターの奥で微かに音がした。

「…そこかい……」

赤鬼は部下の数人に目配りをし、それに頷いた若い鬼の三人はそこ目掛けて歩き出し、カウンターの奥の入口へ消えて行った。

それから間もなく、部下達の消えた場所からガシャンガシャンと何か争っている様な音が聞こえ始める。中には時折、若い男と思わしき悲鳴も。

それもやがて静まり、店内には静寂が広がった。

意外にも呆気ない終わりに、赤鬼は落胆を隠せない。

苛ついた表情をそのままに、右手にある商品棚を金棒で粉砕する。

「……終わりか…」

そう呟いた瞬間――カウンターの奥から何かが飛来して来た。

思わず身構えた鬼達であったが、その何かの正体を確認すると構えを解く。

「鬼や…ワイ等より鬼みとうな奴がおる…」

それは先程の部下の一人の若い青鬼だった。

――――だがその余りに惨たらしい状態に、鬼達の間で戦慄が走る。

青鬼の四肢は曲がる訳が無い方向へ曲がり、その名だけに青い皮膚には赤黒い痣が無数に出来上がり、所々から血が吹き出す。

怪我の無い箇所など無いのでは、と錯覚する程の有様であった。

部下達は青鬼から顔を逸らしたり、終いには震え始める者もいた。

彼等は異界より召喚された身である。とは言ってもこの世界の住人とは種族の違い以外特に無く、召喚された時から普段と変わらず過ごす事が可能だ。

物に触れ、触れられ、食料を口に出来、身体も普通に傷付く。その痛みも感じる。

そしてこの世界で負傷したとしても還る時には全て修復され、後遺症も残らない仕様になっている。許容を越えたダメージを負った場合は問答無用で送還されるが。

それが戦い好きな者達にとっては都合が良く、機会があれば我先にと召喚へ応じるのだ。

人間から多数の召喚を依頼される場合、大抵は目的が戦いの為であるのが殆どなのだから。

「おおぉぉ…生き返るぅ～……」

その青鬼は呻き声を上げながら、ゆっくりと送還されて行った。

「…まさか…あの兄ちゃん…！！」

赤鬼がカウンターに視線を移せば、奥の入口の右手の壁に腕を組んだ状態で背中を預け、横目でこちらを見詰める上半身裸の青年の姿があった。

剥き出しとなったその鍛え上げられた身体には、切り傷、火傷、弾痕等多数の傷痕が残り、青年が幾多もの修羅場をくぐり抜けて来た歴戦の猛者であるという事実を証明をしていた。

当人の秋斗は唖然とする赤鬼達を見遣ると、フッと口元の端を吊り上げる。

次に組んだ腕を解き、握った手の甲の先を下へ、掌を上へ向けた形で右手を持ち上げる。そしておもむろに人差し指を立て、その指をクイクイと手前に何回も折り曲げる動作を繰り返す。

つまりは鬼達に対してのメッセージ。良く映画のワンシーンでありがちなものだ。

掛かって来な、と言う意味である。

鬼達がその意図を理解した時、既に秋斗はカウンターの奥へ戻っていた。

「…おもろいやんけ、兄ちゃん」

赤鬼は眉間にシワを寄せ、周囲に血管を浮き掘りにさせ、その怒りを顕わにしていた。

例えるならば、長年マグマを溜め込み、今にも噴火しそうな火山と言ったところか。

赤鬼は思い返す。

鬼に生まれて８０年。男は強くあるべきだと信じ、幼少期より己を鍛え上げ、何時しか特定の鬼達を纏めるまでにのし上がった。そんな人生の中で彼はここまでコケにされたのは初めての経験だった。

「ええやろう…この赤鬼、名を豪鬼(ごうき)！その喧嘩全力で買わせて貰うで兄ちゃん！！」

その雄叫びに続いて部下達も叫びを上げ、皆して強敵が居るであろうカウンターの奥へ突入する。

その奥に広がった光景、それは雑貨店には不必要であろう程の異常な広さを持った――調理場であった。

その中心のテーブルには先程鬼達を挑発した張本人、切干秋斗が胡座をかいた状態で存在していた。

彼は瞑想しているらしく、両目は閉じられていた。

「……アンタ達に一言だけ言って置く…」

「…何や」

閉じた目はそのままに、秋斗は静かに口を開いた。

赤鬼は今にも動き出さんと疼く身体を押さえ付け、次の一言を待つ。それこそが戦闘開始の合図だと言わんばかりに。

「キッチンでは――負けた事が無いんだ」

秋斗が両目を開くのと鬼達が飛び出すのは同時だった。

４７対１の――蹂躙が始まった。

どちらが、とは推して知るべし。

、

第弐話　独壇場（後書き）

まだ完全には無双させません、引っ張ります。

逆にそちらに気を取られ過ぎたのか、途中で何を書いているのか解らなくなった（笑

……文才が欲しい…。

第参話　強さと弱さ（前書き）

転生チート系小説を読んでいて前々から疑問に思った事があったので、間接的にその内容を書いてみた。

一応言って置きますが、別に否定している訳ではありません。こういった考えもあるんじゃないか、と思っただけですので。

相変わらず文才が無い。

第参話　強さと弱さ

――――とあるアクションスターの話しをしよう。

彼はミシガン州ランシング市の生まれである。

７歳の頃から初めて格闘技に触れ、１７歳で日本へ来日。英語教師をしながら禅、合気道、剣道、柔道、空手を学び、合気道に関しては７段まで上り詰めた。他にも太極拳を始めとして、複数の中国武術を習得する。

以降はその経験を活かし、アクションスターへの道を選択。その無敵に近い圧倒的な強さと不死身さで、次々と悪党を殲滅するキャラクターを確立。その代表的な主演映画は沈黙シリーズと呼ばれ、人気を博す事となる。

映画中では彼独自の拳法を使用しており、それは主に合気道の技法を中心としている。他にナイフ格闘術、古流柔術風の関節技や空手、棒術、太極拳なども多用する。

本物の武道家である彼ならではのリアルな戦い方は、後にこう名付けられた。

――――○ガールアクション、またはセ○ール拳（神拳）と。

リーダー格の赤鬼の物よりは小さいが、それでも普通から見れば巨大な金棒が真っ正面から秋斗へ振り下ろされる。
体重百キロはくだらない巨大の灰色の鬼、その全体重を掛けた一振り。モロに喰らえば人間なぞ軽くハンバーグの材料と化すだろう。
だが彼はそれを苦にもせず、身体の軸を９０度右手へ曲げるだけで躱す。

チリッ、と金棒に無数に生えた刺の一つが鼻先を掠める。だが戦闘開始から浮かべていた涼し気な表情は全く揺らがない。寧ろまだまだ余裕だ。

接触すべき対象を失った金棒は床へ深々と減り込んでいた。
持ち主は引き抜かんと力を込めるが、無数の刺が釣り針で言う反しの役目を果たし、びくともしない。

殺傷能力を高める為の加工が仇となったのだ。

「ぬぐぐぐぐぅ…」

顔中を真っ赤に変色させ、血管を浮き立たせながら力む灰色の鬼に、秋斗は追撃を加える。

金棒を握る鬼の両手の間接を外し、引っ張り続けていた為に伸び切った両腕をそれぞれ自らの両脇に挟む。
目を白黒させる鬼を尻目に、その状態のまま鬼の腕を僅かに捻って肘を床に向かせる。そして主に背筋と腰に意識を入れ――瞬時に

後方へ反り返った。

普通ならばその引力により、鬼は低いままだった重心を引き上げられただけの筈だ。だがこれは全身の力を余す事無く一気に込められたもの。ならば一番初めに負荷が掛かる部分、肘が逆間接の方向へと瞬間的に力を受けるのは必然だった。

肘はその負荷に耐えられず、ポキリとくの字の形にあっさり折れた。

「は…えぇ…？」

素っ頓狂な声を出す灰色の鬼。骨折の痛みに悲鳴を上げないのは、瞬間的過ぎたが故に痛覚の伝達が遅れているからだ。

秋斗は伝達が完了する前に鬼の両足の脛も蹴り砕き、新たな第二間接を作り出す。それも一瞬の内に繰り出した二連撃で。

その曲がった箇所の反対側には、折れた骨先が皮膚を突き破り、顔を覗かせていた。

「グアアアアァァ！！？」

腕と足の痛みを同時に感じた灰色の鬼は崩れ落ち、床に顔を激突させた。

「どっせぇぇぇい！！」

「死に晒せぇ！！」

今度は左右挟み打ちの形で赤と白の鬼二人組が飛び掛かる。

タイミングは素晴らしく完璧だ。どうやら二人は以前よりタッグを組んだ戦法を取っているらしい。明らかに慣れた動きだ。

二人はそれぞれ二本ずつ、小さめな金棒を持っており、互いの攻撃にある死角を埋める事で回避を困難にする意図が読める。

――だがその戦法には決定的な脆さがある。

何故ならば、それは必ず二人の息が揃わねば成立しないと言う絶対条件だからだ。

秋斗は二人組が間合いを詰めるより早く、突如として左手の赤い鬼に突貫した。

予想外の行動に赤い鬼は焦ったのか、本来の二人同時攻撃を忘れ、こちらへ突っ込んで来る男へ向けて金棒を×字に振るった。

そんな苦し紛れが秋斗に当たる筈も無い。金棒の長さを把握した彼は赤い鬼の前で急停止、振らり下ろされる直前に一歩後退する事によりあっさり躱した。

そして金棒を振り切った体勢の赤い鬼の両手首を掴み――軽く捻る。

――――コキリ。耳に余韻を残す嫌な音が、騒音が響くキッチンの中で通った。

「ぎぃぃやゃあああぁぁ！！ワイの…ワイの手首がぁあぁぁ！！」

「相棒ォォォ！！？」

だらりと垂れ下がった手首の先が、少々の振動の度にタコの如く踊る光景はかなりホラーである。

――――だが悲しいかな、秋斗はそんな悲痛な悲鳴を上げる赤い鬼に対して容赦などしない。

床に落ちた二本の金棒を邪魔だとばかりに蹴り払い、今度は両膝目掛けて横から回し蹴りを繰り出す。

無論、力任せの蹴りでは無い。身体の軸に、腰に集中して意識を置いた、最小限の筋肉の動きで爆発的な威力を作り出す武の脚技。

秋斗自身、自らの技の原理については今現在でも曖昧にしか解っていなかった。

だがこの身体の芯、骨の髄まで染み付いているのは嫌でも理解していた。

この結果を得るにはこうすれば良い、こう動けば良いと、意識しなくとも身体が自然と動く。

それはまるで、赤ん坊が一人でに二本足で地面に立つ事を知っている様に。

その蹴りは赤い鬼の左右両膝に続けざまに命中。膝を保護している皿、膝蓋骨を粉砕した。

「ぎょえええぇぇ！！！」

それだけに留まらず、骨以外にも皮膚が裂けた膝からは血が噴き出し、床を赤く染める。

構造的にも立つ事がままならなくなった赤い鬼は前のめりに倒れ

伏した。

「――――っ」

ここにきて秋斗の顔に変化が現れた。後悔、悲しみ、怒り、負の感情が入り交じる表情へと。

本来の彼は他者を傷付ける事を拒絶、嫌悪している。相手が下衆や外道であれば例外だ。

だが今回は相手側がこちらを殺しに掛かって来ている。身体も自然と反応してしまうし、例え殺し返したとしても正当防衛が成立する。罪に問われる事は無い。

それでも秋斗は負の感情しか浮かばなかった。

――――あれは麻帆良国際大学附属高等学校に入って三年目、既に優闘生の切干と広く名を知られて暫く経った頃だった。

ある時彼は別のクラスで虐めが発生している事情を知った。

情報ソースは自称舎弟の不良達。彼等はこうして稀に秋斗が放って置かないだろう情報を知らせてくるのだ。

何故かその時は妙に沈んでいたが。

彼が更に詳細を聞けば酷い有様だった。何やら虐め対象は女子一人で、理由は母親が元ＡＶ女優であったという噂が何処からか発生したからだそうだ。

世論とは得てしてプラスよりマイナスイメージが広まるのが早い。その証拠に、クラス全員には噂の発生からたったの二日後に知れ渡

ったらしい。

それから間もなくして虐めは始まった。

しかもそれは陰でコソコソとした陰湿なもので、秋斗にバレない様に仕組まれた事だった。

女子生徒達が中心となって虐めているならばまだ解る。

だが今回は男子生徒達が中心だと聞いた秋斗は腸が煮え繰り返る思いだった。

確かにそういう関係の仕事は、言い方が悪いが余り清潔感を感じない。同じ女であれば嫌悪の感情を向けても可笑しくは無い。

――――だが男は別だろうに。

健全な男子生徒ならば、今までそれ関連の商品にお世話になった事は有るだろう。同性愛者か不能で無い限り、寧ろ無い奴の方が異常だ。

おおっぴらには無理だが、男としては内心で感謝こそすれ、蔑む真似など出来る訳が無い。

まあ日頃の鬱憤を晴らす目的もあるだろうが、簡単に言えば男子生徒達は下衆の方向でその女子生徒を見ているのだ。

話しは変わるが、自然界で生きる野生動物達、その雄達の中で子孫を残せるのは強い者だけだ。力で他の雄を捩伏せ、雌を我が物として支配する。

その名残が人間の男にも有るのだろう。三大欲求以外の欲、征服欲、支配欲として。

男とは得てして自分の中に獣を飼っている。それを野放しにするか、躾るかはその者次第。下衆と紳士の決定的な違いはそれである。
例え女性に接している最中、下心が生まれようとも、それを抑える事が出来ずして何が男か。

恐らく彼等は弱い立場で只受け入れるしか無い女子生徒を一方的に虐げ、優位に立つ事で征服欲等を満たし、あわ良くば手籠めにしようと考えているのだろう。

秋斗は自分の都合で他者を振り回す事を断固として許さない。虐めは勿論、特に女性に対して有るまじき態度をとる男に関しては。

彼は少しでもそんな情報を聞いたり目撃すれば即座に動く。
まず関係者一同を捕まえての尋問。そして加害者を、時に虐めの原因を作った被害者を指導したりしていた。

只の優等生ならばそんな事は不可能だったろう。
だが今の彼は優闘生の異名を持つ程の有名人。それを行える力も権利も、周囲の暗黙の了解として確立しているのだから。

麻帆良学園の全体図は非常に大きく、生徒の人数も比例して多い。
麻帆良国際大学附属高等学校はその長い名に恥じない、一定の成績以上の優秀な生徒達が集う高校だ。その分日々の課題や規律は厳しい。

だがその反面、長く過ごせば過ごす程に生徒達はストレスが溜まり易い。その発散の為に、虐めを始める馬鹿な輩が居るのだ。
虐め対象は成績が低めだったり、容姿に特徴があったり、今回の様にマイナス印象の噂がある生徒に限られる。

なまじ頭が良い連中だけに、虐める理由などいくらでも作り出せるのだから余計にタチが悪い。

そんな中で秋斗が今までに解決した虐め事件の累計は、大から小まで１５件に及ぶ。

個人の成果としては異常な数だ。

ちなみに不良達が解決したのも２０件以上ある。

やはり人格は更正したとしても未だ現役の彼等だ。本場のメンチに脅しは効果覿面らしい。

その反面で、虐め加害者が恐怖の余りトラウマ気味になり、後でやり過ぎだと秋斗にちょっぴり叱られたりしていたが。

今回の件は不良達も偶然知ったらしく、直ぐに対応しようとしたのだが、出席日数がそろそろ限界で惜しくも断念。秋斗を頼ったのだと言う。

彼等がやる瀬ない表情で情報を持って来たのはそんな背景があったのだ。

親御さんや身内の事第一に考えろ、と言う秋斗の教えに従ったからこその苦渋の選択。出席日数不足で落第など以っての外だった。

不良達の大半は秋斗とは別の学校に所属している。

出席日数に余裕さえあれば普通にサボり、一日中彼に追従するか、自主的に仲間達で人助けをするのが日常だ。

秋斗本人は舎弟の件を正式に認めてはいない。だが不良達の意志を受け継いだ彼は即座に動いた。

授業中に体調不良を訴えて退席。担任教師からまたかといった表

情を向けられながらも許可を貰い、そのクラスへ直行した。

虐め現場のクラスも授業中だったが、秋斗は迷わず教室のドアをノックした。

数秒後に顔を出したのは生物学を担当している年配の男性教師。元々極度の痩せ型な体型ではあったが、良く見ればその顔は妙に窶れていた。

男性教師の様子の原因が気になった秋斗は、ドアの隙間から生徒達の様子を覗き見し、納得した。

誰も生物学の教本を出していないのだ。

だが勉強していない訳ては無く、各自が思い思いの教本を取り出し、好き勝手にしている。

ちらほらと席の空席も目立つ。クラス全体の四分の一程度か。

――――流石の秋斗もこれにはキレた。

確かに生物学は他の教科と違い、受験範囲外の教科でもあるし有効性も余り無い。

だが歴とした授業だ。知識は役に立たずとも、学ぶ事自体に意味が有ると解らないのか。

自分が好きな教科ばかりを勉強して、嫌な事を避け続ける者は将来絶対苦労する。

この時、秋斗の成すべき事は決まった。

後ろで自分を止める男性教師を制し、教室に侵入。そして次の瞬間、その教室には鋭い眼光で生徒全員に睨みを効かせる男、かの優闘生の切干が降臨した。

予想外の人物が現れて驚愕したのか、生徒達は皆硬直し、室内は突如として静寂に包まれる。

そしてやはりクラスの生徒達はほぼ全員が、彼を見た途端に顔を青ざめていた。

後ろめたい事をしている証拠である。

秋斗は取り敢えず彼等を見渡すと、気付く。先程確認した幾つかの空席は、虐め対象の女子生徒の席も含まれていたのだ。

彼は自らの威圧感に怯えを隠せない男子生徒の一人に問うと、彼女とその数人の生徒達の居る場所まで丁寧に教えてくれた。

それを聞いた秋斗は早急に教室を立ち去った。

生徒達皆に生物学の教本を出すよう念入りに釘を刺して。

――そして場所は移り、校内体育館の物置扉の前。

秋斗が扉に耳を当てると、室内からは複数の声が聞こえた。何やら何処か荒々しい。

彼は急激に焦燥感に襲われ、扉を蹴り開けた。

――そこで見た光景に秋斗は絶句した。

数えるだけで計八人の男子生徒達が中におり、一人の小柄で気弱そうな女子生徒が紛れていたのだ。

――下着姿を曝して仰向けに横たわり、前と後ろから二人の男子生徒に押さえ付けられている状態で。

七人の男子生徒は秋斗の正体に気付いたのか、この世の終焉を迎えた様な顔をする。残る一人は彼の顔を知らなかったのか、下卑た笑みを浮かべながらこう言った。

――何だよ、お前も混ざりたいのか、と。

秋斗はその顔に見覚えがあった。

今までに“指導”してきた男達の中にも幾人か居た種類。大抵ガタイが良く、集団で行動し、腕力と数に任せて物事を進める本能人間。女性を物として見ており、食い物にしては警察沙汰にはならない様、写真などを撮影して保険と言う脅しを掛け、次の獲物を探して街をさ迷う下衆共。

まあ当然奴等に対しては“指導”の他、虚勢して証拠と共に警察署の前に裸で放置するという相応しい罰を与えたが。

そんな奴等と同じ笑みを、その男子生徒はしていた。

取り巻き達は一斉に、こいつは何を言い出すんだと言わんばかりの表情を浮かべていたが、全ては手遅れ。

――気付けば秋斗は既にその下劣な顔を手加減無しで踏み潰していた。

蛙の潰れた時に発する声が響くと同時に、周囲に飛び散る血。蝿を散らした様に逃げ出す男子生徒達。

もしも最後の一人が後悔する素振りを多少なりとも見せれば、秋斗の行動は変わっていたかもしれない。だがあの顔が自分の行為に何の罪悪感も感じていないと解った時点で、彼の怒りは臨界点を越えていた。

秋斗は彼等を逃がすつもりなど無く、直ぐに彼等を追跡する。
そしてその背中に手を伸ばして制服の襟を掴んだ――――それ以降の記憶は無い。

秋斗が次に気が付いたのは病院のベッドの上だった。

外傷などは一切無く、医師の話しでは何かのショックで意識を失っていたらしい。
一応本人で確認はしてみたが、違和感がある程に身体中は綺麗な肌をしていた。

結局彼は詳しい事情が解らぬまま入院する事となった。
退院当日に自称舎弟軍団全員が病院に押しかけ、騒動になったのは今でも有名だ。

――――その時の余談だが、彼は不良達に揉みくちゃにされながらも、その中でちらほらと金色の長髪が視界に映ったとか映らなかったとか。

後で聞いた話によれば、あのクラスの事件は内密に処理されたらしく、虐めを黙認していた担任教師は懲戒免職、参加していた生徒達の大半は退学までは免れたそうだ。

只、当事者の男子生徒八人はどうなったかは不明だった。
一つだけ確かなのは、麻帆良学園都市内で彼等の姿を見る事ははは無くなった…と言う事だ。

彼等以外の生徒達はその件から一月後、人が変わった様に毎日真面目に授業に取り組んでいた。

その事件以来、秋斗は自分の能力を隠す様になった。
時々集まる元舎弟達に対しては例外だが、事情を知らない初対面の人間には念入りに秘匿した。

しかも妙な事に、あの事件の彼に対しての責任の追及等は特に無く、寧ろ通算事件解決数が増えただけで済んだ。
だが秋斗の精神に多大な影響を及ぼしたのは間違い無かった。

――――彼は今でも不意に思い出すのだ。
靴越しであるが、男子生徒の顔を踏み潰したあの感触を。自分から必死に逃げ惑う男子生徒達の、恐怖に支配されて歪んだあの表情を。

身体では鬼達の相手をしながら、頭の中で過去を振り返った秋斗は考える。
この拳法の本来の使い手ならば、同じ状況に陥った場合はどうしただろうか、と。

これも自らの業として背負い、自分の生き方を最期まで貫き通すのか。痕跡を消し去り、完全に表舞台から姿を消すのか。

――――今更だ。本当に今更、振るう拳に迷いが生じる。

秋斗は自問自答する。
先程既に三人の鬼を反射的に殺したではないか。その勢いで仲間達を得意のフィールドに誘い出し、同じ事をするつもりだったではないか。

仕方ないだろう。殺しに掛かって来るとは思わなかったんだから。
いや、もっと別の方法があったんじゃないのか。

全く進展の無い議論、生まれる葛藤。
迷い、考え、迷い、考えて、また迷う。

この過ぎた力を振るう資格は自分にあるのだろうか。ここまで至る努力もせずに、他者を助けるという当たり前の事を続けた前世の得点とやらを使ってまで得た力を。

「貴様よくもぉぉぉ！！」

相棒をやられた怒りに任せ、背後から襲い掛かって来た白い鬼。秋斗はその顎を後ろ向きのまま、踵を上にして蹴り上げ、潰す。
呆れた事に、この動作も無意識の内だ。

もはや使い物にならないだろう顎を両手で抑え、激痛に床をのたうちまわる白い鬼を見下ろす。

そして流れる様に、止めの踵下ろしを繰り出さんと、おもむろに足を引き上げてゆく。

その光景は正に断頭台（ギロチン）に固定され、今にも処刑を待っている罪人。

「っ…白土（はくど）ォォッ！！」

床に伏せた体勢からそれを眺めていた赤い鬼は思わず相棒の名を呼んだ。

あの一撃を受けても相棒は死ぬ事は無い。元の世界に還るだけ。
そうなのだが、赤い鬼は叫ばずにはいられなかった。

「ぐぅ……ガ…ゲゥ！！！」

「っ！！？！？」

秋斗はそこでいきなり何かに弾かれた様に頭を上げ、引き上げた足を床にゆっくりと下ろした。

突然の彼の奇行に赤い鬼は驚いたが、今は好都合とばかりに相棒目掛けて這いずって行く。

間近で確認すると、その怪我は更に酷く目に映った。赤い鬼はこれが此処で負ったもので良かったとつくづく思う。

例え手段を選ばない戦闘者だったとしても目に余る容赦の無い攻撃。筋違いではあるが、それを迷い無く繰り出した秋斗を赤い鬼は睨んだ。

だが当人は僅かに肩を震わせながら、顔を俯かせているだけ。

部下達の後ろに佇んでいたリーダーの赤鬼は眉をピクリと動かした。

———突然だが、切干秋斗には三通りの顔がある。

人助けを主に考え、行動する善人の顔。日々の鍛練を忘れず、勝負事には手を抜かない武術家の顔。そして敵を情け容赦無く叩き潰す、戦闘者の顔。

どれが本来の秋斗かと言うと、初めの二つがそれである。

最後は彼自身が怒りの臨界点を突破するか、命の危険に曝されるかして初めて自動的にスイッチが入るのだ。

例えるなら普段の顔は安全装置が効いている状態と言った感じだ。

その最後のスイッチが入るメリットは、自分の身の安全、又は敵の殲滅が確実になる事。
デメリットは、一度入れば思考回路も戦闘者のものへと切り替わり、普段通りの正常な思考はほぼ出来なくなってしまう事。

だがそのスイッチは初めに三人の鬼達が殺しに来た時、既に入ってしまっていた。
それが次々に潰していった鬼達の悲痛な叫びにより段々と正気が戻って行き、最後の赤い鬼の叫びが止めとなり、戦闘者としてのスイッチは完全に切れた。

則ち今の秋斗はもはや戦意に殺意は全く無い普通の状態へ戻っているのだ。

そんな事を知らない鬼達は、先程までの立ち回りを見ていただけに、完全に隙だらけな状態でも手を出せずにいた。

———だが動いた者もいた。

「…ぬん！！」

「ガッ…ア…！？」

それはいつの間にか傍観に徹していた筈のリーダーの赤鬼だった。
赤鬼は自慢の金棒を容赦無く真横にぶん回し、秋斗を弾き飛ばす。
だが手応えが無い。その事に気付き、顔を顰る。
秋斗は金棒が当たる直前、威力を軽減する為に一瞬だけ横へ跳ん

だのだ。

「……ちっ…」

戦意喪失した状態で不意打ちを喰らっても尚、反射的に反応する程の技には舌を巻く。

だがそれだけの力量を持ちながらこの体たらく―――赤鬼は何処かすっきりしない様子で、後ろ頭をボリボリ掻き毟る。

金棒を担ぎ直し、壁に打ち付けられてずり落ちる秋斗に呆れ半分な声を掛けた。

「…そー言う訳かいな、兄ちゃん」

「ガフッ…ゲホッ」

「甘い…甘いなぁ…」

赤鬼は呟きながら、赤白の二人組を含めて部屋中に散らばっている鬼達に近寄る。無事な者など居ない、皆目を塞ぎたくなる程の酷い惨状である。

だがそれを見ても眉一つ動かさないのは流石はリーダー、と言ったところか。

倒れ伏した鬼達は申し訳無さそうな表情で赤鬼を見上げる。

「儂等は確かに半分仕事、半分趣味言うた…」

「お頭…」

「けどなぁ」

両肘両足を折られた灰色の鬼に近寄り、チラリと視線を送る。

送られた鬼は僅かに微笑み、頼んます、と頷きを返す。

「ここまでやっといて止める方が」

「！！！」

「儂等にとっちゃあ…どんな怪我すんよりも苦痛なんや！！」

秋斗は嘘せ返りながらも、目の前で起こった出来事に目を剥いた。

———赤鬼は何と自分の金棒で、その倒れた鬼を叩き潰したのだ。

仮にも部下たる鬼を、だ。

血肉や骨に臓物が飛び散るスプラッターな光景が脳裏に浮かぶ。

だがそれは現実にはならなかった。何故なら潰れた筈の鬼は光の粒子となって消えて行ったからだ。

秋斗は次々に起こる予想外の展開に着いて行け無い。

「儂等は喚ばれた身の上じゃあ。ここで死ぬ様なもん喰らってもこうして還るだけや」

「還…る…」

「傷も無い状態でな。安心したか…？」

「……っ」

悪戯が成功したかの様に意地悪く笑う赤鬼に、微かな殺意を抱く。

「やっぱそうかい……始めに兄ちゃんが関係者やと勘違いしたのは謝っとくわ。儂も焼きが回ったか？」

今度は一転してバツが悪そうにはにかむ赤鬼に、先程の殺意は直ぐに払拭される。

外見に似合わないその愛嬌さに、秋斗は困惑を隠せない。

「けどまさかそんだけの実力がある一般人が居るたぁ…思わんかったわ！！」

赤鬼はその間にも先程と同じ行為を繰り返してゆく。

部下達はそれを当たり前の様に享受して行く。

「儂には兄ちゃんがどうやってそないな力を身に付けたんかはよう解らん…けどな！！」

———壁に上体を突っ込んだ体勢のままそれをやられた鬼達には、秋斗はひそかに同情した。

遂に残るは赤白の二人組のみとなった。

「せやけど、どんなデカイ力も持つ奴の物(もん)や言うんに違いは無い」

力を持つ者はそれを自らの意志で振るう資格があり、同時にそれが齎す責任も背負わなければならない。

一度でもその力を振るえば、それから逃げる事など許されないのだ。

赤鬼は秋斗にそれを再認識させた。

「…大いなる力には大いなる責任が伴う……」

「何や…解っとるやんけ」

ちと見直したで、と軽い笑みを返す赤鬼。

生徒にこの問題を問くよう言い、見事正解したので褒めてやっている教師の様な笑みだ。

某アメコミヒーローの祖父の名言を引用した秋斗は何処か申し訳無い気持ちになる。強いて言えば、カンニングして問題を正解したのを褒められている生徒の立場か。

「面目無いッス…お頭」

「ふごごご…」

「気にすんなや赤土(せきど)。白土は口開くな、吹き出しそうや…ぐふふっ」

どうやらあの二人組は赤鬼も一目置いていたらしい。他の部下達より親しげに話している。

もがもがと抗議の声を上げる白土を抑える赤土に、それをからかう赤鬼の姿は、見た目も相成って親子に見えなくも無い。

そのまま雑談を幾分かやり取りした後、赤鬼は同じく金棒で二人組を介錯した。

行動にギャップが有り過ぎて違和感を感じずにはいられない秋斗であった。

「さて兄ちゃん…仕切り直しと行こうや」

赤鬼は金棒を担ぎ、秋斗の方向へと振り返る。

その顔付きは先程と一変、目付きは鋭く獰猛に輝き、歴戦の武人の面構えに。纏う空気は触れた先からピリピリと感じるものへと変貌した。

「宣言するで。兄ちゃんが今逃げればこの店は儂等が壊す、絶対や」

「……」

「その後は…そうやな、適当な女子(おなご)でもそこら辺で見繕って持ち帰るか…」

ふと気付けば秋斗の迷いは薄れていた。

「――――っ！」

「人攫い程度、昔此処に住んどった儂らの先祖も良うやった事やぞ。特に可笑しくもないで」

後者の行為は最大の禁忌。絶対に阻止しなければならない。

眼前の赤鬼は悪党ではない。寧ろ善い存在だ。秋斗は短い時間しか接してはいないが、それは察する事は出来た。

だが赤鬼は必ず実行するだろう。嘘をつく性分でも無い筈だ。

――そしてその挑発の中に隠された本意も。

秋斗が一番に恐れているのは、本気で力を振るう事ではない。それによって起きる結果だ。

あの事件の前は半ば衝動的に力を多用していた為に、そんな事は考えてもいなかった。

だがその一端を経験した時、初めて気付いた。その齎す効果、責任の重さを。

だからこそ理由が必要だったのだ。本気で力を振るうべき理由を。

そして――逃げ道が欲しかった。

秋斗には一息で人を殺せる様な力を自らの事情で用いる責任に耐えられる強弱な精神などは無かった。故の選択だ。

誰かを傷付けた、それは〇〇の為だった。誰かを殺した、やらねば〇〇が殺されていた。

言い方を変えれば只の責任逃れだ。理由を他へ求める弱者の考え。

殺す覚悟、殺される覚悟が云々の問題では無い。

決断せねばならない場面は確かにあるだろう。だがそれはそれ。戦場に生きる身でも無し、常日頃からそんな覚悟を持つ必要性など皆無。

ふとした拍子で簡単に傷付け、殺すのが可能だから、それ自体が嫌だからこそ恐れているのだ。

――人を殺すと言う事、それはその人がこれから歩んだであろう人生の無数の可能性を奪う事だ。
その罪は余りに重い。故に覚悟を決めたからと次々に人を殺せる人間は異常だ、狂っている。背負える筈も無い罪を数え切れない程に重ね続けていられるのだから。

戦場で戦う兵士ならばそれは仕方が無い。殺らねば殺られる、そんな場所なのだ。不殺を求める事自体が間違っている。

だがそうでもない人間が殺しを肯定するなど、傲慢の一言に尽きる。
前世も平和大国日本で育った秋斗は尚更そう考えていた。

大き過ぎる力を持った弱い人間、それが切干秋斗だった。

如何に力を得ようとも弱者は所詮弱者。だからといって精神の強化をあの転生用紙に望むつもりも本人にはない。

だがそれで良い、無理に強くなくて良いのだ。弱くとも他者の為に何か助ける事は出来る。自分が目標とする在り方に至る事も出来る。そう信じているのだから。

――秋斗はスイッチを切り替えた。

戦闘者としてでは無い、三つの顔全てのスイッチを同時に入れると言う初めての試みを。

他者を傷付ける事を頑なに拒む只の善人ではない。拳は振るうが決して殺しや軽傷以上は負わせない生粋の武術家でも無い。かと言

って情け無用の殺しに特化した戦闘者でも無い。
殺しは最後で最後の手段とし、戦いすら理由が無ければ進んで行わない。だがやむを得無い場合は致し方ない。手加減は無しに初めから本気で行く。情けを掛けるか掛けないかは相手を見定め、決める。

今まで使い分けしてきた顔を一つにした、本来の切干秋斗として在るべき姿を。

「…先程までの愚行をお詫びします」

内養功で怪我の治療を済ませ、ゆっくりと立ち上がる。

「そして、心からの感謝を」

秋斗の心情を察し、本気で戦う理由を作り出してくれた赤鬼に対して頭を下げる。

実は赤鬼のそれはある意味でも一種のお詫びであった。
秋斗は鬼達の非道に徹しながらも人情味を捨てていない精神を戦いの最中で感じたからこそ、本気で拳を振るうのを戸惑ったのだ。
それを感じさせた部下達、彼等を率いた自分こそが秋斗から戦意を削いだ元凶であると認識したのだ。

部下の責任がどれ程のものであろうが、頭を張る自分の責任として背負う。その精神、正に上に立つ者としての鏡であった。

「…何の事かさっぱりやなぁ」

「解ってます」

ダメージはもう残ってはいない。体力は幾らか消耗したが、それ以外はほぼ全開状態である。

秋斗は真っ直ぐな目で赤鬼を見遣る。

対する赤鬼はその視線を受け、不覚にも身体が震えた。

長らく感じる事が無く、もはや忘れ掛けていた懐かしき感覚――武者震いだ。

「この店が潰れる程度なら問題は無い。けど貴方達を放って置けば誰かが犠牲になる…ならば」

「ふん」

ならどうした、と赤鬼は挑発する視線を返す。

「今此処で、潰させて貰います…！」

「……ガハハハハッ！！そうや、その目を待っとったんや！！」

赤鬼は残る数少ない部下達を下がらせ、金棒を両手で構えた。その身体からは闘氣が溢れ、部屋全体が軋む錯覚を覚える程。後ろに控えた部下達も身体中を震わせながら恐怖した。

秋斗はそれに真っ向から立ち向かう。

重心をやや前に置き、両手の掌を前に掲げ、ゆらゆらと宙をさ迷わせた構えを取る。まるで放たれた闘氣を受け流す様に。

説明は不要。二人は視線を合わせただけで、この立ち合いの内容を決めた。
手加減抜き、搦手無し、正々堂々とした一対一のタイマン勝負を。

「…何時か」

互いに対峙した状態のまま、赤鬼が静かに呟く。

「何時か兄ちゃんが自分の為に力出せるようなって、そん拳に迷いが無うなった時……そん時ぁ…」

「……」

「また…戦ろうや」

まるで自分が負ける事が決定している様な台詞だ。

だが確実に結果はそうなるだろうと、二人は互いに理解していた。

「喜んで…！」

「へっ！そん時は宜しゅうしてくれや！！」

互いの声が合図となり、二人は前へ踏み込んだ――――。

エヴァンジェリンと茶々丸が切干雑貨店へ到着した頃には全てが終っていた。

店内の商品棚は半数以上が破壊され、その残骸が足の踏み場の無い程に床に散らかっている。

紛れも無く、敵の集団がこの店に侵入して暴れた証拠だ。

「…静か過ぎる」

いくら武術に秀でているとは言え、秋斗は一般人に過ぎない。大量の化生を相手にして無事でいられる訳が無い。

何故彼が狙われたのか。十中八九、理由は彼自身の持つ堅気とは思えない雰囲気のせいだ。

敵もこちらの関係者と間違え、襲ったに違い無い。

そしてこの店内の静寂さ。

照明も読書喫茶コーナー以外点いている事から、閉店間際だったのは確実だ。

エヴァンジェリンは長く常連を続けているだけに、この店の事は熟知していた。

則ち切干秋斗は閉店の為の作業をしている最中に敵と遭遇し、下手すれば交戦したのかもしれない。

出来ればそうあって欲しくは無いが、エヴァンジェリンは最悪の

状況も覚悟する。

「…マスター、奥から生体反応が」

「行くぞ、茶々丸」

拳を握り締め、その場所へ向かう。

案の定、カウンターの奥のキッチンも悲惨な状況だった。
壁には所々に大きな穴がぽっかり開き、調理器具は床に落ちたり曲がったりと、使い物にならない。

「！！」

キッチンの一番奥側に人影を二つ発見する。
一つは床に倒れ、もう一つは壁に寄り掛かっているらしい。

エヴァンジェリンはそこ目掛けて駆け出す。
自分をからかっては憎らしい笑みを浮かべ、幾ら図々しい態度を取ろうとも湯呑みを出しては持て成してくれる、掛け替えの無い友の姿が頭を過ぎる。

生存の可能性が絶望的な状況ではある。だが僅かな希望をその小さな胸に抱きながら、そこに視線を移した。

まずは手前から。
床の人影はどうやらいつも襲撃してくる関西の術者らしい。何かの儀式的な和服を身に纏い、仰向けに倒れている。
その顔は内出血に骨の陥没等で凹凸に形が歪み、血塗れだ。両足はマリオネットの様に曲がってはいけない方向に曲がるなどの酷い

有様で、流石の彼女でも十秒以上は直視出来なかった。
そしてもう一つの人影のある壁側に視線を移し――見付けた。
「秋斗…？」
そこには無数の刺が生えた巨大な金棒を右肩に立て掛け、壁に寄り掛かりながらスヤスヤと眠る切干秋斗の姿があった。
もしかすればと考えたが、やはり彼は敵と戦ったらしい。得物から判断するに、かなり上位に位置する鬼があの中に存在していたのだろう。
秋斗の上半身は裸で、所々に痛々しい痣があり、その戦いの凄まじさが垣間見える。
完全に無事とは言えないが、彼が生きていた事を確認出来たエヴァンジェリンは心から安心した。
見た目相応ではあるが、年甲斐も無く涙が浮かんでくる。
「何でこんな無茶をした…馬鹿者が」
秋斗自身が大量に居た筈の敵を全て切り抜けたという事実に驚く余裕は無い程に、彼女は嬉しかった。
痣だらけの上半身を優しく撫で、彼の生を直接感じ取る。
心臓の鼓動で僅かに動く左胸、無駄な脂肪一つ無い鍛え上げられた筋肉の筋。そして彼の代謝が良いのか、少々高めの体温を。
「マスター。術者と思いわしき人物ですが…僅かに生きてます」

茶々丸の報告を聞き、エヴァンジェリンは振り向きもせずに即答した。

「放って置け」

「……了解…」

術者の和服の胸元を開き、症状を確認した茶々丸はその命令に従って、特に何をするでも無く放置した。

心無しか、茶々丸のその術者の状態を確認する手つきが雑な気がする。

本来ならばその術者は確実に生かした後に、情報を引き出すべきだ。しかも今の彼は明らかに重傷であり、早急な治療が必要である。それを放って置くなど、そいつは死んでも構わないと言う事。それこそ許されない行為だ。

だが茶々丸はそんな横暴な命令に素直に従っている。その辺り、術者に対して些か怒りを覚えているらしい。

「呑気な奴め…」

エヴァンジェリンは未だ爆睡中の秋斗の頬を両手で包み、その顔を正面から見る。

本当に爽快感漂う幸せそうな寝顔だ。心配掛けさせた癖に、殴り倒したくなる。

だがくぅくぅと鼾をかき始めた彼を起こさない様に優しく、その頭全体を胸元に抱いた。

「無事で…良かった…」

彼女は普段は殆ど見せない心からの笑みを浮かべていた。

それを直ぐ傍で眺める茶々丸から小さな機械音が聞こえていたのはお約束だ。

――――この後、急報を受けたタカミチが大至急で飛んで来て、運悪くこの光景を目撃、一悶着起きるのだが、それは別の話である。

当人は最後の最後まで鼾をかいていた。

、

第参話　強さと弱さ（後書き）

可笑しいな、何か邪気眼系の香りが…。

でも凡人がいきなり強過ぎる力を手に入れれば普通は使用する事を恐がりそうな気がしませんかね？

【例】

転生チートオリ主「約束された勝利の剣（エクスカリバー）！！」

轟音どかーん。周辺消し炭。

転生チートオリ主「ひいっ！？こんなのホイホイ使えるかよ！！！」

ガクブル

みたいな。

あれ？常に自分の力に恐怖しているのが邪気眼なのかな？

ふっ、所詮邪気眼を持たぬ者には解らぬと言う事か…！

、

第四話　未知との対面（前書き）

ちょくちょく書き方が変わったりしますが、その内に落ち着く筈。

ちなみにアンチ要素はありませんのであしからず。オリ主はずっと中立の立場で行きます。たまに毒は吐きますが。

第四話　未知との対面

「なあ、秋斗…」

「ん？」

友人と二人で草原に寝転びながら、タカミチは隣の友人に声を掛けた。

その声はくぐもっており、見れば顔は内出血でボコボコに腫れ上がっている。元々の顔付きの面影など全く解らない、それ程に酷い有様だった。

やはり痛みは有るらしく、時折顔の一部をヒク付かせながらも何とか言葉を繋ぐ。

「君はどうやってそんな力を手に入れたんだい？」

「……」

その質問に友人、切干秋斗は表情を曇らせた。

聞いてはいけない内容だったのかと、タカミチは今更ながらに自らの失言を悔いる。

過ぎた好奇心は猫をも殺す。以前より彼は空気を読めなかったり、

察しが悪い部分が多少あった。それは本人も薄々自覚していた。

とは言っても人の性格は中々変えられない。ならば時間が掛かろうともゆっくり直して行けば良い。タカミチはそう考えていた。

しかし今回はそれが原因で友人関係に亀裂を入れかね無い事態を齎してしまった。改めて自らの考えが浅かったせいだとタカミチは後悔する。

――――まあ実際は影響など特に無いのだが。

事実、それは秋斗自身の問題だ。タカミチがどうこう言ったところで変化するものではない。

例え何かあっても秋斗は彼を許しただろう。秘密と言われるものには少なくとも興味が湧くのが普通だ。そんな質問ぐらい許容出来ない矮小な人間でもない。

人は誰しも探究心を持つのも普通なのだから。

だがそうと知らないタカミチは自分の失態だと、友人を傷付けてしまったと結論付けた。人には一つや二つ、誰にも話せない秘密があると言うのに、浅はかにも自分はそれを追求してしまったと。

タカミチが自己嫌悪に陥っていた最中に、秋斗は両目を閉じたまま静かに呟いた。

「貰い物――そうとしか言えない」

「…え？」

まさかの返答にタカミチは戸惑った。

弾かれた様に顔を秋斗へ振り向かせる。

「気付けばそこにあったって感じかな。タカミチと違って大した事もしてないのに……ズルい人間だよな、本当」

秋斗は表面上は苦笑しながら、自虐的に言い捨てた。

流石に鈍いタカミチでもこれ以上はマズイと直感したのか、話題を切り替えようと試みる。

だが彼が口を開くよりも早く、秋斗は言葉を重ねた。

「大き過ぎるんだよ。使い道も限られるし、持て余す事しか出来ないし……俺がこの力を使う資格が有るのかどうかすら怪しいさ」

「そんな事は…」

断じて無い。私利私欲に用いず、正しい事に使っている。そう否定したが、聞き入れられる事は無かった。

「…あるさ。さっきタカミチを相手にした時だって、実力の三割程度なんだぞ？それ以上を完璧に制御出来る自信が…俺には無いんだ」

タカミチは耳を疑う。三割であれなのか、と気が遠くなる感覚がした。

———居合拳、またの名を無音拳。そう呼ばれる技をタカミチは

用いる。ズボンや上着などのポケットを鞘に、納める拳を刀に見立て、居合抜きの要領で拳圧を放つ技。

彼自身が尊敬して止まない、今は亡き師匠から伝授された思い入れの強い技だ。

その威力は凄まじく、師匠程とは行かないが、木々を軽々と薙ぎ倒す程。

拳圧自体は視認可能だが、速度は目で追う事は並の魔法使いでも至難の技。当たれば一瞬で勝負が着く必殺技であり、タカミチ程修業を積めば連発も可能で、強力無比と言っても過言では無い。

――――だが秋斗には通用しなかった。

放たれた拳圧を翳した掌でいなし、そうで無い時は感覚で躱し、何時の間にか間合いを詰められる。

それからはもう打撃、打撃、打撃、と攻撃の暴風雨。近接格闘では居合拳を繰り出せない上、タカミチ自身も一応格闘の類いも習得してはいたが、相手が悪過ぎた。接近されて数秒も持たず、地面に膝を付く事となった。

身体中はダメージの蓄積により力が入らず、鉛の様に重い。視界も常に揺れ続けて嘔吐感を催す。そんなタカミチが頭を上げると、眼前には脇を閉めて右手を引き絞った体勢の秋斗が居た。

そして最後に鳩尾に放たれた右手の掌を前に突き出した掌撃。それは咄嗟に氣で強化された身体も関係無しに内部に直接ダメージを叩き込むもので、直撃と同時に呆気なく意識を刈り取られた。

タカミチは自分が負けたのだと自覚した時、ただ笑うしか無かった。

無論、奥の手はあるにはあるのだが、先程の三割発言を聞いて通用するのかどうかが今現在非常に不安になっていたりする。

「…恐いなぁ」

秋斗はクククッと笑いながら、右手で目元を覆い隠す。

その手は微弱ながら震えていた。

「本気なんか出したら、一体どうなるやら……」

「…秋斗」

直ぐ風に掻き消されてしまいそうな掠れ声を聞いて、タカミチは考える。

この友人はこんな無神経な自分に対して悩みを打ち明けてくれた。出来る事ならば協力したい。

だがそれは思った以上に複雑な問題だ。タカミチは優秀とは言えない頭で懸命に悩む。

その悩みを簡潔に纏めるならば、強力な力を制御しきれない、全力を出せない事だ。

ならば修業を積めば良い…と言う訳でも無い。三割で居合拳すら

通用しないのだ。全力がどれ程のものか計り知れないが、常勤を逸している事は確かだろう。

何より秋斗は魔法を知らない一般人だ。修業環境も限られるし、自分が良く使用している魔法道具の“別荘”の様なものなど有る訳が無い。

――――切干秋斗はこの麻帆良では知る人ぞ知る有名人だ。何か偉大な記録を残したとかでは全く無い。困っている人々や異常事態を見れば即座に行動し、打算は無しに無償で解決するヒーローとして。

正義の味方、そう呼んだ者もいたが、秋斗は否定した。

困っている人が近くに居れば普通は助けたいと思うだろう。誰でも出来るそれを実行しただけで何処が正義の味方なのだ、と。

その言葉にタカミチを含め、麻帆良在住の魔法使い達は自分達の考えを覆された。

有効に魔法を用いては悪を倒したり、人々を助ける。それこそが皆が目標とする正義の魔法使いであり、立派な魔法使い（マギステル・マギ）の称号を得る為の道のりだと信じていた。

魔法を使う事が当たり前であり、魔法さえあれば人々を助けられる。人々の為になるのだという考えを常識としていた彼等だったからこそ、その言葉は嫌でも響いた。

困っている人々を助けるのは魔法使いの自分達にしか出来ない事では無く、誰もがやろうとすれば当たり前に出来る事なのだ、と。

自分達の常識が崩れ落ち、目標を失った魔法使い達は相当居た。

悪を倒して平和を守るという選択肢がまだ残っていると主張する者も居たのだが、それだけの存在ならば真の正義の魔法使いとは言えないと、主張した者達は後々気付いた。

当て嵌めるならば――この世界で言う軍隊と同等、または力を行使するだけの只の戦力。犯罪発生時に出動する警察などと一緒。つまり魔法使いとは持つ力の種類が異なるだけで、何も特別なものでは無いではないか、と。

極論ではある。だが魔法関係者達の大半が皆学園に通う若い学生達であり、真っ直ぐな理想を持っていただけに至った結論だった。

加えて魔法という力を特別視する傾向があったのもそれに拍車を掛けた。

中には魔法の狂信者の様な思考の者も居たが、そういった輩は初めから周囲の仲間達からは白い目で見られていた為に、伝染する事は無かった。

――――余談だが、その狂信者達がこれらの出来事を引き起こした罪人として秋斗を始末しようと目論んだところ、ある日突然謎の武道家集団に再起不能まで叩き潰されたらしい。

幸か不幸か、タカミチは体質的な理由で魔法を使えない。その為に立派な魔法使いを目指せる立場ではなかった。

故に秋斗の言葉を聞いて失意に陥る事は無かったが、周囲の関係者達がそうなってしまったのには流石に驚愕した。

それから間もなくして学園長はこの事態を重く見た。

これではいけないと即座にタカミチへ指示を出し、クラス違いではあったが同期である秋斗へ接触させ、魔法云々の真実は伏せた説明で相談を仰いだ。

彼ならばどうにかしてくれる筈だと、学園長の期待から来た指示だった。

説明を聞いた秋斗は相談に応じ、失意に陥った関係者達の激励を引き受けた。間接的とは言え、それを引き落こした責任を感じていたからでもある。

秋斗はタカミチに関係者達を集めるように頼み、一同を前にして言った。

――――自分は貴方達の目指すものが何かは知らない。だがあの言葉はあくまで建前であり、全てが全て万人に出来る事では無い、と。

タカミチはふと、過去に秋斗はこうも言い残していたのを思い出した。

――――人として当たり前の事をしているのに讃えられる謂れは無い。事実、力が及ばない時は手を引いて誰かに任せているし、全てに手を出してはいないのだから。

そう言って、町役場から日頃の行いを讃えて出された賞状を外側では受け取りながら、中身は一蹴したのだ。

只のちっぽけな感謝状か、自称舎弟達全員も受賞対象であったならば、秋斗は受け取っていたろう。だが今回は大袈裟過ぎた上、特定の個人の行いのみを讃えて出されたもの。彼の考えから見るならば、感謝の意を受け取る資格はあるが、称賛を受け取る資格は無いのだから。

当然、役場の所長である男はその脂ギッシュな顔を歪めて怒りを露に表した。

所長とは言っても普段の彼は周囲の評判が頗る悪く、性格も捻くれている事で有名な人物だった。

今回の賞状の授与も当然下心がある。自分は町の情勢を良く見ているのだと言うアピールによる周囲からの評価上昇、及び将来有望な青年に好意的に接して媚びを売るのが目的だった。

――――だが秋斗は賞状を本当の意味で受け取らなかった。

その理由に嘘は無く、加えるならば所長の男の目付きが妙にやらしかったのもあったりする。

所長就任から一定の権力を得て傲慢気味になり、今までの媚び売りで顔も広かった所長は自らの賞状を蹴った眼前の若造に怒り、社会的報復まで考えた。

所長は頭を下げて謝罪する秋斗に対し、この神聖な受賞を侮辱する気かと、立ち寄った周囲の人々が引いているのもお構い無しに、大声で怒鳴り始めた。

だが顔を上げた彼と真正面より目を合わせた瞬間、突如として声

が出なくなった。

――――貴方とてその力を持っている。それをこんな事よりも、自分の力が及ばなかった誰かの為に使ってくれる事を願う。

直接言われた訳では無い。だが所長はその目が何を訴えているのか、何故か鮮明に理解出来た。

そして同時に思い出す。自分がなぜ所長を目指したのか、かつて胸に抱いていた純粋な理想を。

――――それから暫くして、その所長は心を入れ替えた。以前までの職務怠慢を改善、より良い町づくりの為に尽力する様になった。

そしてつい昨年に定年を迎え、役場の職員達や町民達に見送られながら華々しく有終の美を飾ったそうな。

叶っても、叶わずとも、理想は理想なのだ。例え失ったとしても幾らでも生み出せるし、それを目指すのは遅かろうが早かろうが関係無い。

そして人がそれぞれ持つ理想が重なったとしても、必ず何処か方向性が異なるものだ。

例えば誰かが正義の味方を目指したとする。それが特定の人の為だったり、不特定多数の人々の為だったり。その手段に力を用いたり、力では無く言葉を用いたりと種類は様々。

そしてその人にはその人にしか出来ない事だってある。秋斗が言った建前とはそういう意味だ。本気でやろうと思えば大抵の事は出

来る。だが同時にその人にはどうやっても不可能な事もあるのだ。

タカミチは魔法関係者達を見渡した。秋斗の言いたい事を察し始めたのか、彼等の瞳には光が戻り始めていた。

皆の復活まで後一歩と言ったところに、秋斗はこう締め括った。

――――貴方達に貴方達にしか無い力が有る。ならばそれを用いねば出来ない事も必ず有る。ヒーローや正義の味方という称号は目指すものでもあり、気付けばなっているものでもあるのだ、と。

良く良く考えれば理想に理想を重ねたオンパレードな台詞である。世界はそんなに優しくなどは無い。

しかし、だからと言って現実ばかりを主張していても余りに虚しい。思考の中心には現実を、片隅には理想を。このバランスを保てればそれが一番の理想なのではないか。

秋斗は関係者達の目を見た時点で既に察していた。詳細は全く知らないが、この彼等の理想は真っ直ぐ過ぎる。だからこそ弱く、歪み易く、崩れ易い。

だが若い内はそれで良いではないか。がむしゃらに目標へ向かって突き進めば良い。後ろ盾は立場有る者達が持つ、それが大人の役目だろうと。

――――もし秋斗が彼等が魔法使いであると知っていたならば、この意見はまた変わっていただろう。魔法もまた彼の力と同じ、容易く人の命を奪える力なのだから。

しかも新世界の魔法使い達には大まかにはあるのだが、自主的に立ち上げない限り明確な組織図は無い。則ち若い立派な魔法使い見習い達には大人の後ろ盾など無い。魔法をある程度習得した後、それぞれの目標の為の修業と表して旅立つ事を義務付けられるのだ。

簡潔に言うならば、彼等は行動一つ一つに自己責任が伴う社会に出たばかりの若者、といった立場なのである。

不用意に魔法を使って問題を起こせば罰が下るし、一般人に魔法を目撃されてしまえば何故かオコジョにされてしまう。そういった者達にとっては本当の意味で、秋斗の言葉は解決策足りえない。

――――しかし彼等は希望を得た。それは無意識の内に切干秋斗という頼れる後ろ盾を見出だしたからだ。

ちなみにこの関係者達の励まし会議の以降、秋斗を取り巻く自称舎弟の数が更に増えていたとかいないとか。

タカミチとはそれがきっかけで交流を持ち、稀に二人で手合わせをする様になっていた。

ちなみにタカミチは未だに勝利を収めた事は無い。戦績は四十二試合中、四十敗二引き分けだ。

「必ず…」

先程の秋斗の呟きから数分程は過ぎただろうか。

タカミチは悩みに悩んだ末、その目標を言葉にした。

「必ず僕が、君の本気を捌けるまでに至る」

「タカミチ…」

それは無理だと、秋斗はそう言いたかった。タカミチ自体が耐えられる保障も無いし、相手を必要以上に傷付けてしまう事も、本気を出して起こる結果を恐れていたからだ。

だがタカミチの真剣な目を見た途端、何も言えなくなった。

「そうすれば君も思う存分、全力を出せるだろう？」

そして同時に納得する。ああ、彼も結構な理想家だったなと。

「だからさ…秋斗。それまで待っていてくれないか？」

嘘偽り無い、友人からの純粋過ぎる善意。それを断れる奴が居れば見てみたい。

秋斗は苦笑しながら、タカミチの意見を承諾した。

「…了解、その時が来たら宜しく頼むよタカミチ」

「任された」

コツン、と拳同士を突き合わせただけの男の指切りげんまんを交わす。

その状態のまま二人は顔を見合わせると、互いに声を上げて笑った。片方は羞恥心を隠す為に。もう片方は自分が原因ではあるが、

まだまだ腫れが残っている面白顔を間近で直視した為だ。
力への恐怖が消えた訳では無いが、何処か心のつっかえが取れた気がした秋斗だった。
「…これは一つ借りだなぁ」
「嫌かい？」
「いんや、俺が女だったら頬っぺたにキスぐらいは贈ったんだけど……ねぇ？」
秋斗は意味深な視線をタカミチに送る。流石に何を言いたいかなど理解出来ない筈が無い。
「流石に御免だよ」
タカミチは幾らか腫れが引いた顔を引き攣らせた。
その反応を見た秋斗は更に笑いが噴き出しそうになるのを堪える。
そんな軽口の応酬を何回かした後、不意にタカミチが何かを思い付いたらしく、提案をしてきた。
「じゃあさ秋斗、僕の悩みも聞いてくれるかな？これで貸し借りはチャラで」
「…いきなりだな、まあ構わないけど」
了承を得たタカミチは安心した。正直言えば、彼を除くとすれば

師匠にしか話せない程の悩みなのだから。

そして内容の殆どが魔法関係であり、その部分は偽る必要があるが。

「有り難う」

タカミチは表情を引き締め、真剣に語り出した。

「実は僕には今面倒を見ている女の子が居るんだ。名前は――」

この時、本来の史実が音を立てて崩れ去った。

切干雑貨店、この時点は存在せず――。

――――懐かしい夢を見た気がする。

秋斗はうっすらと目を開くと、瞼から差し込んで来る光に思わず唸り声を上げながら思った。

上を向くと見覚えがある天井が視界に映る。最後にこれを見た記憶としては、確かあの金髪幼女を手合わせの時に誤って気絶させてしまい、家まで運んで介抱した時だったか。

則ち此処は同じ場所、彼女の家の部屋だと理解出来る。

ぼんやりとした意識のまま、脳をゆっくり再起動させながら記憶のファイルを読み込んで行く。

どうやら耳も機能し始めたらしい。近くから聞き覚えのある数人の声が聞こえてくる。何故か言い争いをしている様だ。それも結構激しい。

人は寝起きの状態だと聴覚が過敏だ。普段は特に問題無い音量でも煩く聞こえる場合が良く有る。

耳が良い秋斗は尚更それが顕著に起こる。しかも寝起きの機嫌が頗る悪いと来た。

———煩い、喧しい、黙れ、静かにしろ。滅多に使わない荒々しい言葉が次々に浮かぶ。

この寝起き悪さは前世も同じで、小さな頃は泣き止ませるまで苦労したと母親からは良く聞かされていた。

何の干渉も無しに起床し、覚醒さえすれば問題は無い。だが今の様に起きて直ぐに耳障りな騒音が聞こえたり等すれば話しは変わってくる。

以前、自称舎弟の不良達が校舎の屋上で昼寝をしていた秋斗を起

こしてしまった事例があった。

その時の状況を、不良達はこう語る。眠れる獅子の由来を初めて知りました、と。

みるみる内に秋斗の眉間にシワが寄っていく。目つきも戦闘者スイッチ並に鋭くなり、纏う空気も重圧を増してゆく。

ちなみに顔は天井を向いたままだ。

「……まずい…！二人共静かにしてくれ！！」

声の内一人はタカミチらしい。此処の所の彼は出張続きで余り顔を合わせていないが、声からして元気なのだと直ぐ判った。

秋斗の口元が吊り上がり、それはもう悪どい笑みが形成される。眉間のシワと相成って、悪者笑いをしながら怒るという珍妙な表情になっているが、重い空気と総じて見れば間違い無く恐怖を煽る仕様だ。

内心では久々に実力七割以上で手合わせしてやろうか、と目論んでもいたりする。

「――っ！？何だ…悪寒が！」

肝心な部分は鈍い癖、こういったところは勘が良いタカミチであった。

秋斗はゆっくり、本当にゆっくりと、その顔を下ろして行く。それに合わせて処刑用ＢＧＭが幻聴で聞こえてきても違和感は無いだ

ろう。

そして未だに言い争っている二人に向けて声を――出せなかった。

何故ならその内の一人の少女が予想外の人物であり、目が合った途端に自身の胸元目掛けて飛び込んで来たからだ。

秋斗はそれの全体重と勢いをかけて生まれた衝撃を、起き上がった上体のみで何とか受け止めながら、何故彼女が此処に居るのかを考える。

窓から覗く日光の色で判断する限り、今の時間帯は昼を過ぎた付近と言ったところか。彼女は在学中の為、本来ならば今頃は中等部に居る筈だ。

タカミチの話しを聞く限り、彼女の授業態度は真面目とは言え無いが、成績はクラス中トップクラス。欠席も無い皆勤状態で、正に優等生と言っても可笑しく無い立場らしい。

だが現在は此処に居る。つまり彼女は授業をサボったと言う訳だ。

しかし何故そこまでする必要があったのか。疑問は絶えない。

思考の渦中の秋斗を余所に、その飛び込んで来た少女は胸元に顔を埋めながら呟いた。

「良かった…起きた」

「……アスナ…？」

秋斗の視界に見慣れたオレンジ色のツインテールが映る。

アスナと呼ばれた少女は彼の胸元に顔を埋めたまま、背中に回した両腕に更に力を入れ、今の体勢をがっちりと固定する。

―――それも普通の人には出せる筈が無い程の力で。

能力の恩恵か、常日頃から鍛え上げている御蔭か、身体の頑丈さには自信のある秋斗も、寝起きにそれをやられれば堪ったものでは無い。

案の定、ギリギリと強烈に締め付けられる胸部の痛みと、肺を圧迫される息苦しさに口から呻き声が漏れる。

「…ぐぉ……が…」

「…心配した」

追い討ちを掛けるが如く、更に力が込められ、骨が軋む音がギリギリからメキメキへ変化する。

秋斗は胴体に括れをもう一箇所作る気かと突っ込みたかったが、呼吸すらままならない今の状態ではそれも叶わない。

「…ぎっ…ぁ……」

「ちょっ、アスナ君ストップ！秋斗の顔色が真っ青に…」

「全然起きないんだもん…」

タカミチの制止も耳に入らず、アスナの両腕の力は増加してゆく。
秋斗の顔色は青いを通り越して紫に近くなり、口からは何か白いものがはみ出してきた。
そして間もなく限界を迎えようとした時――彼女の頭上にミニサイズの握り拳が落下した。
「止めんか小娘！！」
寺の境内にある鐘の様な音が室内に響く。一体どれ程の力で殴ったのか計り知れ無い。
「っ……痛い…」
だがそれを一言で済ますアスナもどんな頭をしているのだろうか。
頭を抑えながら、秋斗を拘束していた両腕を解き、胸元から顔を上げる。
そして涙の浮かんだ左右色違いの緑と青の瞳で、自分の頭に拳骨を落として来た犯人を睨んだ。
「貴様は怪我人の怪我を更に悪化させるつもりか！？」
そこにはベッドの上に仁王立ちするエヴァンジェリンの姿があった。
先程までアスナと言い争いをしていたのは彼女である。

睨み合う二人の少女達を余所に、拘束から解放された秋斗は咳込みながら、救世主を見る様な視線をエヴァンジェリンに送る。

———例え彼女の両足が布団ごしに自分の脛の上に乗っていようとも。

「…だって心配したんだもん」

「もん…じゃない！せっかく私が寝る間も惜しんで世話を焼いてやった苦労を何だと思って……あ…」

そう言い切る前に、エヴァンジェリンは秋斗を見た瞬間、その顔はみるみる内に赤く染まっていく。

「ゲホッ…そうなのか？」

「あ…いや、そのだな…」

秋斗の疑問には答えずそっぽを向き、口ごもる彼女。その態度は元々余り素直ではない性格故の羞恥心から来ているのは明らかである。

その様子を見たアスナはニヤリと悪どい笑みを浮かべると、秋斗の耳元に自分の顔を接近させ、耳打ちした。

「アキトを運び込んで来た時は凄く騒いでた。タカミチと私以外の人は絶対に近付けるなっ、て」

「…あのエヴァが？」

「うん、一生懸命介抱してた。私もだよ？」

秋斗は褒めてほしいと訴えるアスナの視線に応じ、頭を優しく撫でてやる。

普段から彼女を妹の様に可愛がっている彼にとっては慣れたもの。力を入れ過ぎず、髪を櫛でほぐすイメージで行う。

ついでに中国武術の応用で、時折頭のツボを刺激したマッサージも併用。その為にリラックス効果もある。

「有難うアスナ」

「エへへ…」

撫でられた気持ち良さか、褒められた嬉しさからか、アスナは表情をほにゃりと緩め、先程と同じく両腕を秋斗の背中に回した体勢へ戻る。

今度は力加減がしっかり出来ており、そのまま胸元に顔を擦り始めた。

その姿はまるで親に甘える子猫。秋斗はそれを苦笑しながらも受け入れる。

そして忘れてはならないと、彼はアスナの頭を撫で続けながら、一番世話を掛けたであろう人物に礼を返す。

「エヴァも有難う」

「だ、だから私は…」

エヴァンジェリンの真っ赤だった顔は更に沸騰し、遂には顔を俯かせて黙り込む。

相変わらずの恥ずかしがり屋だな、と秋斗はそれを微笑ましく見詰めていた。

その状態から数十秒程経過した時、エヴァンジェリンは突然何かに気付いた様にはっと頭を上げ、未だに甘え続けているアスナ目掛けて騒ぎ始めた。

「と言うかそこの小娘！一体何を吹き込んだ！？」

「んん～、ありのまま」

「き、貴様ぁぁぁ！！」

先程の熱が残った顔でギャーギャーと喚き出すエヴァンジェリンも微笑ましかった。

「ははは…」

そうして三人が賑やかになっている時、タカミチは後ろからその光景を眺めていた。

その中でも特に、声のトーンは一定であるが表情は豊かな少女、アスナ・K・B・高畑を。

ほんの数年前までは全くと言って良い程に無表情であった彼女。まさかここまで変われるとは思ってもいなかった。

功労者である秋斗には非常に感謝しているが、一番感謝してもしきれない人も居る。

――その人物こそがタカミチの今は亡き師匠であり、アスナの父親代わりの様な存在であった男、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグだ。

普段はクールで渋い中年男性だが、重度のヘビースモーカーな為に度々周囲から苦情を受けていた元紅き翼メンバー。

彼とタカミチ、そしてアスナは共に旅…と言うより逃避行をしており、この麻帆良の事を知るまでは常に彼女を狙う追っ手達を撃退する毎日を送っていた。

何故アスナが狙われるのか、それは彼女の出生と能力が原因だ。

アスナの本名はアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア。魔法世界の伝統を重んじる小国、ウェスペルタティア王国の姫君。そして王族の血筋にしばしば生じる――完全魔法無効化能力を持つ特別な子供。その様な者達は黄昏の姫御子と呼ばれ、彼女はそのひとりだった。

先の大戦では、その元凶を作り出した者達でもある秘密結社、完全なる世界（コズモエンテレケイア）が彼女の力を利用して魔法世界全ての魔法を消去して崩壊させようと画策し、実行されたが途中で紅き翼に阻止されたという経緯がある。

戦争の終結と共にその組織の長は倒されたが、依然として組織自体は小規模ながら健在しており、彼等の計画の要でもあるアスナを

未だに狙っているのだ。

ガトウは行動を共にしながら、彼女が平穏に過ごせる場所を探し求めてていた。だからこそ麻帆良の存在を聞いた時、彼は即決した。

麻帆良学園都市は物理的な外部干渉に対する防衛能力は非常に高い。それは都市全体を囲う様にして展開されている大規模な結界によるものが大きい。

それもその筈、麻帆良の大結界は世界樹の膨大な魔力を利用しており、それを破壊する事は紅き翼全員が力を合わせても難しいだろう。

しかもそれを管理している近衛近右衛門は紅き翼のリーダーと顔見知り。多少狸な部分もあるらしいが、信頼出来る人物だとガトウは聞いていた。

――――だが麻帆良へ向けて移動を開始した時、それは起きた。

そうはさせんとばかりに異常な数の追っ手と、彼等が召喚したであろう異形達が現れたのだ。

確かにガトウは並外れた実力があった。だが戦闘力の低いアスナとタカミチの二人を庇いながらの持久戦では余りに部が悪過ぎた。

気付けば目的地まであと一歩…と言った位置まで来た頃には既にガトウは瀕死の重傷を負っていた。

麻帆良に入ってしまいさえすれば、アスナはもう結界の庇護下だ。そう考え、彼は決断した。

――そしてガトウはアスナをタカミチに託し、その命を犠牲に二人を逃がした。

その直前、タカミチは彼から遺言を預かっていた。それはアスナには魔法などの事を忘れて普通に生きて欲しいと言う願い。

それと同時に渡されたのがとある道具。完全魔法無効化能力のせいで普通の忘却魔法が効かないアスナの為に用意された、記憶封印の為の特殊な魔法道具だった。

タカミチは遺言通り、何時か必ず実行しようと考えていた。だが麻帆良で修業を積むと共に学生生活を過ごしている内に、次第にこの事を悩み始めた。

――確かにアスナの幸せの為には魔法を忘れた方が良いのだろう。だが本当にそれで良いのか、と。

そんな時に彼は信頼出来る友人、秋斗と出会い、悩みを打ち明けた。魔法に関しては所々を偽り、こう纏めてだが。

――彼女の名前はアスナと言う。実は彼女は普通では考えられない程に辛い過去を持っていて、つい最近も親しい人が亡くなったばかり。しかもその人はこう遺した。彼女はそれらの事実を忘れて普通の少女として過ごして欲しいと。自分もそう思うし確実な方法もあるのだが、どうだろう、と。

タカミチの中ではガトウの意志を尊重した末の結論。だが秋斗の返答は即答かつ簡潔だった。

――事情は大体把握した。けどそのアスナって娘はどうしたと考えているんだ。

そこで初めてタカミチは気付いた。彼女の為と言いながら彼女の意思を無視し、自分の考えのみを通そうとしている事に。

確かにガトウは言った、普通に生きて欲しいと。だがそれはあくまで願望であり、道具を渡した時もやれとは言っていなかった。

則ち彼はタカミチに選択肢を委ねたのだ。あの遺言はアスナがその生き方をする様にしろ、と命令した訳では無い。彼女の幸せの為ならどちらを選択しても構わないという意思表示であったのだ。

秋斗は話しを聞いた時から、タカミチが遺言の人の意思を察せずに自分の考えしか持っていない事を悟っていた。

そして後悔から頭を抱えている彼に追い討ちを掛けた。

それが理解出来るならば、自分が今やるべき事も理解出来るだろうと奮い立たせる為に。

――人にも種類がある。幸せの為に辛い過去を忘れる事を選択する人。それを背負い、その過去があったからこそ今があると幸せを享受出来る人。その娘は一体どちらなんだろうな、と。

タカミチはそれを聞いた瞬間、いきなり礼を言ったかと思えば、秋斗が振り向いた時には既にその場から消えていた。

それが瞬動と呼ばれる氣を用いた歩法だとは秋斗は知るよしもない。

残された彼はそんな友人を、相変わらず素直で行動が早いなあと感心しながら昼寝を開始した。

その一方で、瞬動連発で急遽帰宅したタカミチはキョトンと佇むアスナにその事を問いていた。

――案の定、アスナは忘れる事を断固として拒否し、一生背負い続ける意志を示した。

余談だが、タカミチが自身はこう考えていたと伝えた瞬間、鳩尾に一発入れられたらしい。

秋斗とはその件以降は更に親しくなり、初めて彼がアスナと顔を合わせたのはそれから二日後だった。

意外と早かったのには理由がある。あのままタカミチを放って置けば、確実に記憶の封印を実行していただろう。それを間接的にも阻止してくれた秋斗にアスナは恩義を感じており、御礼が言いたいとタカミチに駄々をこねたからだ。

――まるで自分が悪者みたいな言い草をされ、彼は軽く落ち込んでいたがそれは見事に無視された。

そして初顔見せ。見知らぬ美少女に突然頭を下げられた秋斗は戸惑ったが、正体を知って納得。取り敢えず特別な事はしていないからと彼女の頭を上げさせた。

そしてそこからまず始まったのは、タカミチに対しての愚痴の言い合いだった。

鈍くて察しが悪い、案外自分勝手、タバコ臭い、老け顔、などなど。最後のは完全に悪口であるが。

その言い合いが終るまでの間、タカミチは背中が煤けていた。

まあそれ等も含めてタカミチの良い部分なのだと、秋斗が最後にそう言った御蔭で何とか立ち直れたが。

それ以降、アスナは秋斗の低姿勢さと独特の雰囲気が気に入ったのか、暇さえあれば彼に会いに行く様になっていた。

魔法の存在は知らない一般人だと事前にタカミチから知らされていたが、二人の手合わせの光景を見た時は流石の彼女も目を剥いていた。

だがやはり魔法とは無関係な分、踏み込める域が限られていた。しかし多少身分を意識して自分と接するタカミチとは違い、礼儀を守った上で誰とも分け隔て無く平等に接し、我が儘な自分に苦笑しながらも何かと応じてくれる秋斗をアスナは兄の様に慕っていた。

自称舎弟の取り巻き達に混じり、彼の背中を追い掛ける彼女自身も、見た目は似ていなくともその在り方は妹そのものであった。

アスナが特に感情豊かに変化していったのもその頃からだ。

エヴァンジェリンとは会う度に言い争いに発展する様になったのも同時期だった。

「ええい、この無礼極まり無い小娘にはもう我慢ならん！この場で

決着を付けてくれる！！」

「上等…！」

二人はベッドから飛び降り、エヴァンジェリンは懐から鉄扇を取り出して構える。

対するアスナも見様見真似の秋斗の拳法の構えを取る。

「…あ～」

タカミチは諦め加減に天井を仰いだ。

「またか…」

秋斗は何とかこの場を治めなければと算段を立て始める。

そうしている内にも時間は進み、少女二人が激突しようとした――その時。

「失礼するぞい」

頭が異常に長いのが特徴の、日本に古来から伝わる妖怪ぬらりひょん。それに酷似した人物がドアから姿を現した。

`

第四話　未知との対面（後書き）

前々から気になっていたタカミチの矛盾行動。結局魔法に関わらせるぐらいなら初めから消すな、と言う事です。それに記憶を消す前のアスナなら絶対拒否すると思います。

実際どうやって記憶を消したのか、どんな状況下でやったのは原作でも明らかにされて無いのでこんな形にしました。

考えてみれば原作の登場人物達って案外皆自己中心的なんですよね。基本いい人なのは判るんですが…。

第伍話　信用と罰（前書き）

書き終わった直後はこんな感じかなぁと思っても、時間を置いていざ読み返してみれば何かが違う様に感じてしまう矛盾。

それでもって、せっかく書き方を変えてみたのに前の方が読み易く見えてしまう矛盾。

どうすれば…。

第伍話　信用と罰

――――全てが温かく、眩し過ぎる。

自分が麻帆良学園に居るなど場違いにも程があるだろう。エヴァンジェリンはそう考えていた。

だが今更何を考えても意味は無いし、どうにもならない。彼女の身に掛けられた呪い、登校地獄が有る限り、それ等から逃れる事が出来ないのだ。

不意にその時の事を思い返す度、口からは後悔と言う名の溜め息が漏れた。

あんな幼稚な罠に意図も簡単に引っ掛かった末、“アイツ”に笑われながらこんな呪いを掛けられるとは、と。

六百年を生きる真祖の吸血鬼であり、最悪で最強の魔法使いと謳われていた癖にこの体たらく。慢心などせずに初めから本気で仕掛けてさえいれば結果は変化していただろう。

光に生きてみろ、と“アイツ”は言った。仕方無しに中等部にも渋々通い、稀に有る学園長もとい狸爺の依頼もこなした。

“アイツ”からの言い分で無ければ確実に断っていた。これが惚れた弱みと言うやつだ。断れる筈が無い。

初めの頃は嫌々だったが、すっかり慣れた今ではどうだ。毎日自分を狙う賞金稼ぎを警戒する必要も無く、朝早く起きるのは億劫で

はあるが、精神的には非常に楽。多くは無いが友人も数人出来た。勉学も難しくも無く、試験でトップを取ってクラスメートの連中に対して威張り倒した時もあった。

エヴァンジェリンは今までの人生には無かったものを感じ取り、毎日が楽しいと思う様になってきていた。

表面には全く出さないが、内心は“アイツ”に感謝していた。

しかし時の経過は速いもので、三年の月日はあっという間に埋まる。そしていよいよ中等部を卒業する瞬間が近付いていた。

思い返せば短く、そして濃密な三年間だった。感無量の余り、目には涙が滲む。

何時か呪いを解きに来ると言った癖に、結局来なかった“アイツ”の事は気にならなかった。多分その内来るだろう、その時は一発、特大の魔法でも打ち噛まして感激してやると意気込んでいた。

だがこの時、エヴァンジェリンは失念していた。正規の手順を踏まず、膨大な魔力で強引に掛けられた登校地獄の呪いは歪んでおり、本来ならば卒業と共に呪いが解ける筈が、今となってはその保障など無いという事を。

―――案の定、それは卒業式を終えた瞬間に起こった。

三年間共に過ごして来たクラスメートや同期の連中が、自分の事の一切を忘れてしまったのだ。

声を掛けても他人の様に接せられ、終いには子供扱いされる。こ

こは小学生が来る場所では無いよ、と。

「どう言う事だじじい！？」

その事実に直面してから直ぐ、エヴァンジェリンは鬼の形相で学園長室まで殴り込み、近衛近右衛門を問い詰めた。

「…落ち着くんじゃエヴァ、今調べとる」

登校地獄に重ねて、彼女の魔力の封印を施した近右衛門は深刻な表情を浮かべながら、詳細を探った。するとこれは呪いの歪みが引き起こした効力の一つだと判明した。

登校地獄の原理を例えるならば、業務用の機械や数式の証明などと同じだ。とある条件を満たせば特定の結果を齎したり、正常に行けば最後にはこの結果に至る、など。

もっと詳しく説明しよう。例えば設定した量を計り終われば自動停止する計量機械がある。これを用いて指定された合計量の物を搬出したいとする。ならばまず手始めにその計量したい合計量を設定し、その後に機械を運転。そしてその量の搬出が終了すれば機械は自動的に停止する。

登校地獄の場合も大体一緒だ。まず正常ならば卒業するという条件を満たした時点で解けるこの呪いを行使したいとする。ならば呪いを掛ける手始めにその条件を、三年間登校し続けなければならないという設定をした上で、正しい手順を以って呪いを掛けなければならない。

だが“アイツ”はそうしなかった。詠唱が面倒だからと言い、持

ち前の膨大な魔力の力押しで呪いを掛けてしまった。

その結果、卒業すら出来ず、三年が過ぎたらまた一年目から繰り返す事を強制され、延々と学生時代を生きねばならない呪いに変貌したのだ。

則ちエヴァンジェリンの過ごしたこの三年間は強制リセットされ、彼女はもう一度一年生からやり直さなければならない。

リセットと言う事は当然、卒業どころかそれまでの経緯は初めから無くなり、クラスメート達がエヴァンジェリンという存在と共に居た事実だけがぽっかりと欠けてしまうという訳だ。

まだ機械の様に異常を感知した途端に非常停止したり、構成が不十分として呪い事態が不発に終るならば良かった。だが“アイツ”にはそんな事すら捩伏せてしまえる魔力があったのが災いした。

「何…だと…」

「可笑しいとは思っとったが、これ程とはの…」

呪いの実情を知ったエヴァンジェリンは顔色を青ざめた。

しかも追い討ちを掛けるかの様に更なる弊害が判明。登校地獄とは別の近右衛門の施した魔力封印、これに前者の呪いが複雑に絡み合い、どちらも解けなくなってしまっていたのだ。

魔力封印とは言っても、エヴァンジェリンの魔力を麻帆良結界の構成に流用するだけの術式だ。これは麻帆良が誇る科学力から生まれたハイテク機器も利用しており、メンテナンスの為の停電時間の

み、彼女は全盛期の魔力を取り戻す事が出来る。

エヴァンジェリンの全盛期の魔力、そして近右衛門の魔力と知識を利用すれば登校地獄自体は解呪出来る可能性はあった。

――――だがその希望すら断たれた。

停電時に魔力が戻るのは一時的に封印の効力が切れるだけで、解かれた訳では無い。構成自体はエヴァンジェリン自身に刻まれたまま。その状態で登校地獄の解呪を試みても先程も述べた通り、複雑に絡み合っている為に不可能。

加えて彼女の悪名は余りに有名だ。その力を警戒している者達は麻帆良にも数多く存在している。当然の如く、過激な思考を持つ者も。

今は封印されているという事で幾分かはマシだが、それを解くともなれば彼等から反対の声が上がるのは必須。最悪暴挙に出る可能性も無きにしもあらずだ。

解呪を期待出来るのは掛けた張本人のみだが、これも何時になるのか判ったものではない。

呪いの劣化を待つにしてもこの強固さである。どれ程の時間が必要なのか想像もつかない。

「――――っまさか…！！」

エヴァンジェリンは不意に気付く。恐らく魔法関係者であるタカミチは自分を忘れてはいない。だがそれ以外は確実にそうなってい

るだろう。そして同じく友人であり、一般人である切干秋斗は――。

「クソッ…！！」

「待つんじゃエヴァ！」

その考えに至る前に、彼女の足は動いていた。呼び止める声など耳に入らない。目指すは生徒指導室。その目当ての人物が日頃から良く出入りしている場所だった。

走る度に心拍数が増加し、肺が更なる酸素を求めて呼吸運動が激しくなる。

人外である筈のエヴァンジェリンは普通ならばこの程度の運動で呼吸が乱れる事は無い。だが登校地獄の他にも魔力、そして真祖の吸血鬼の力を封印されている為、今の彼女の身体は見た目通り、十歳の少女と相違無いのだ。

精神は身体に引っ張られる――という言葉がある。実を言えばエヴァンジェリンは正にそれで、初めて人の温もりを知った少女が突然、それを一度に失ったのと同じである。

六百年程前、普通の可愛らしい少女であった彼女は僅か十歳で吸血鬼にされ、その犯人に復讐した後は毎日が命懸けの生活だった。異端の象徴である彼女に味方する者はおらず、例え居たとしても周囲から迫害され、傷付けられ、時には捕らえられて処刑された。

エヴァンジェリン自身も同じ経験をしたが、不死故に死ぬ事すら叶わず、苦痛の日々が続いた。

――――だからこそ力を付けた。暴力にはそれを上回る圧倒的な暴力で返せる様に。

敵対する者は殆ど殺した。相手もその気で来ているのだ、やり返されても文句は言えない。

それがおよそ六百年も続いた。普通に考えたとしても嫌でも強くなる。敵対者達も殺さずに軽く追い払える程度の実力も付き、何時しか様々な異名を持ち、大衆から恐れられる存在になっていた。

だが相変わらず味方は出来ず、途中で旅の共として自立人形を造り、従者としたりしたが、根本的な部分で孤独なのは変わらなかった。

――――そんな状況を打ち破ったのが“アイツ”だった。

偶然にもエヴァンジェリンの危機を救い、彼女の正体を知ってもそんな事関係無いと切り捨てた。

何の理にも捕われない奔放さと豪胆さ、そんな“アイツ”に彼女は恋い焦がれた。

それから直ぐ、自身が追われる立場である事などお構い無しに四六時中“アイツ”を追い掛け続けた。その内心は想いを告げるのが目的では無く、捕まえた暁には我が物として独占せんとする為。

だが現実は厳しい。既に想い人と結ばれていた“アイツ”自身はエヴァンジェリンをストーカーとしか認識していなかった。

やがて彼女の意地とも言えるしつこさに、欝陶しさがピークに達

した時、ある事をふと思い出した。古い知り合いが麻帆良学園の警備員が不足しており、その為の実力の有る人員が欲しいと呟いていた事を。

そして思い立ったら直ぐ実行。“アイツ”はエヴァンジェリンに罪を償わせるという名目で適当に呪いを掛け、麻帆良に縛り付けた。

考えてみれば理不尽極まりない仕打ちに見える。だが彼女が今までに積み重ねてきた罪をこれで償えるのならば、軽過ぎると言ってもいいのかもしれない。

女にとっての恋とは特別な意味を持つ。男にはそれを理解する事など一生出来やしない。

ましてやエヴァンジェリンは三十も生きていない餓鬼の“アイツ”に屈辱を与えられた。普通なら殺されている。だがその事を許した上に、理不尽な要求にもしっかり応じてやる彼女の心中は計り知れ無い。それ程までに、惚れ込んでいたと見えるだろう。

「……嘘つき…！」

エヴァンジェリンは走りながら、そう言い捨てる。

何時か呪いを解きにまた麻帆良に訪れると、“アイツ”はそう約束した。つまり呪いが自動的に解けるであろい三年以内に来ると言う意味だと、そう思っていた。

それがこの結果だ。

好きな人の為なら何でも出来ると豪語する女性も世間には存在す

る。だが実際はいくら惚れた者の頼みとは言え、その想いのみを糧に出来る訳ではない。小さな部分を補ったり助けてくれる者、所謂助言者やそれに値する者が必要不可欠なのだ。それが親類だったり身近な友人だったりと様々だ。

エヴァンジェリンにもその存在は居た。彼女には親族など存在しないし、唯一可能性が有るのは本心で語り合える友人のみだっただけに、入学から間もなくしてそれが出来たのは幸いであった。

他にも不特定多数の友人は居る。しかし時々一緒に遊ぶ程度はするだけの付き合いだ。

ちなみにタカミチ・T・高畑という弟子及び親しい友人も居るのだが、流石に本心までは打ち明ける関係とは違う。理由としては立場的なものもあるし、彼の性格上、多少頼りがいに欠ける部分が大きかったからだ。

その反面、普段から醸し出している圧倒的な存在感と面倒見が良い性格で、魔法とは関わりが無いが、真祖の吸血鬼としてではなくエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルとして扱ってくれる秋斗の存在は例外だった。

知り合ったばかりの時はギスギスした状況下であったが、今では家族に近い関係を築く程までになっている。

その身近な心の支えが無くなろうとしているのだ。これ以上のショックがあろうか。

階段を上がり終え、右手に曲がれば直ぐに生徒指導室に着くといったところで一旦停止。上体を前に倒し、膝に手を置いて呼吸を整

えると同時に、最悪の事態を想定しての覚悟を決める。

それからゆっくりと歩み始め、ドアの前に立つ。室内からは何処か重みのある中年男性の声と、聞き慣れた低音の若い男の声の二つが聞こてきた。

エヴァンジェリンは震える手を何とか抑え、ドアを数回叩く。

「ん？誰か来たみたいですね」

「む、この時間帯には珍しいな。どれ…」

「ああ、座ったままで良いですよ。俺が出ます」

先に反応したのは若い声の持ち主の様だ。

音から察するに、彼は椅子に腰掛けていたのだろう。よっと、と言う掛け声を出した後に直ぐ、カツカツとした足音が近付いて来た。

やがてその足音との距離がドアを挟んで約六十センチ程度となった時、ドアノブが内側から捻られ、手前に引かれた。

現れたのは長身で平凡な容姿の男子生徒。彼こそがエヴァンジェリンが最も親しく、皆と同じく彼女の事を忘れているかもしれない友人、切干秋斗だった。

「…秋…斗」

エヴァンジェリンは耳を澄まさなければ聞き取れ無い程の声で、彼の名を呼んだ。

その声には忘れているかもしれないという恐怖と、忘れていて欲しく無いという僅かな願望が含まれていた。

「ん？エヴァじゃないか……おい、大丈夫か？」

普段通りにからかうような真似はせず、いつもとは様子の可笑しい彼女を優しく労る様に返事を返す秋斗。

それこそがエヴァンジェリンの望んでいたもの。僅かな希望が叶った瞬間だった。

「切干、誰だ？」

「エヴァンジェリンですよ、新田先生」

「…マクダウェルだと？珍しいな」

部屋の奥から問い掛けて来たのはこの麻帆良学園中等部でも鬼教師と恐れられる男。現代国語担当及び学園広域生活指導員でもある新田であった。

鬼と呼ばれる由縁は、その誰に対しても妥協を許さない厳しさにある。当然、人生経験の浅い大部分の生徒達はそんな彼を受け入れる事は無く、目の上のタンコブ宜しく思っていた。

そんな彼だが、卒業のこの時期になると何故か周囲が賑やかになる。その原因はこの学園を昔に卒業したＯＢ達だ。

やはり新田の厳しい指導の意味と有難みは社会に出て初めて解る

もの。後々で彼に恩義を感じた者達は皆例外無く、この時期になると勤め先の会社等を休み、卒業式の見学はついでに彼の元へ集うのだ。

卒業式が終った瞬間、新田の周囲はＯＢ達に占拠され、あれやこれやと感謝の言葉の嵐が巻き起こる。

その光景に対し、心身共に未熟な在校生達は異常なものを見る様な目を向けていた。

現在生徒指導室にいる理由は、彼等の相手をするのが思いの他大変で疲れる為、こうして休憩を取っているのだ。

新田が今腰掛けている椅子の後ろにその証拠が有る。そこには多分贈り物である立派に包装された箱が、一人では到底持ち運び出来ない量が山積みになっていた。

教師とは生徒に好まれる指導をするのでは無く、例え嫌われようとも生徒の将来の為になる指導を行うべき。新田はそう考えた上で今日も変わらず厳しい教鞭を振るう。

だが時には違う一面も見せる。鬼の目にも涙と言う諺がある様に、彼は立派になった元生徒達を見る度、時折涙を零す姿が目撃されている。

常に生徒を思いやる優しさを鬼の仮面で覆い隠し、生徒達の為なら自己犠牲も厭わない。正に新田は教師の鏡であった。

精神年齢が既に三十を越している秋斗はこの事を普通に理解出来た。故に新田先生が忙しい時は代わりに生徒達を指導したりと代役

を務め、暇があればよく話をしたりフォローを欠かさなかった。
新田自身もそんな秋斗を嬉しく思う反面、余り度が過ぎる様なら時に叱り付けた。私や周囲の事ばかりに気を配るより、自分の事も考えなさいと。

――――鬼の新田の影には優闘生の切干在り。そう言われる程に、二人が共に並んで歩く事は珍しくも無かった。

下手すれば同じ教師達よりも交流が深かったりする秋斗は、新田の事を教師として尊敬すると同時に父親の様に思っていた。

前世の父親の事は忘れてはいないが、この世界に置ける彼は孤児であり、無意識の内にその存在を誰かに求めていたのかもしれない。

実を言えばそれは新田も同じで、秋斗を早熟で出来た息子の様に見ていた。稀にとんでもない騒ぎに自ら飛び込んで行ったりするやんちゃさがある為、その度に心配して仕事が手に付かない程に。

それを毎回無傷で解決してしまう手腕は持っていると理解はしている。だが教師、もとい父親としては心配なものは心配なのだ。当然、秋斗が何知らぬ顔で帰還して来た時は真っ先に容赦無く怒鳴った。

優闘生だの何だかんだ言って、案外一番新田に叱られている回数が多い秋斗だった。

「ふむ、思えばマクダウェルが此処に来るのは一年振りか…」

新田がそう呟いた途端、エヴァンジェリンは顔を跳ね上げた。

一年振り。自分の名前を言ったのもそうだが、この教師も秋斗と同じく呪いの効果を受けていないのか。

予想外ではあったが、逆にそれは嬉しい誤算と言うやつだ。

「しかし、誰かに連れて来られた訳でも無しとは珍しいな。どうかしたのか？」

エヴァンジェリンの胸の中にある感情が込み上げ、次第にそれは溢れ始める。

秋斗が再び彼女へ振り向いた次の瞬間――それは崩壊した。

「…解りませんが、只様子が可笑しいです。おいエヴァ、一体……っ！」

何があったんだ、そう問い掛けようとした秋斗の腹部にドン、と衝撃が走った。

ふと下を向けば、そこには蛍光灯の光を反射して煌びやかに揺れる、思わず触りたくなる程サラサラとした金髪が。

状況を理解出来ていない秋斗はその中心のつむじをただ直視していた。

「…ひっぐ……ぐす…」

「……エヴァ…？」

上から目線の語り口調で、部が悪くなると直ぐに態度に表れ、稀に妙に達観した雰囲気を見せていた友人の姿は無い。只自分の制服にしがみ付き、肩を震わせる小さな少女が居るだけだ。

突然の出来事に秋斗は焦った。彼はこういった経験は乏しく、正しい対処法などを知らない。しかもそれが予想外の人物ともなれば余計に。

思わず後ろに振り返り、人生の大先輩である新田に視線で助けを求める。

「……ふぅ…」

だが頼みの綱はいつの間にか再び椅子に腰掛け、のんびりとお茶を啜っており、こちらを全く見向きしようともしない。

可愛い子には旅をさせよ。真にその子供の事を思っている親ならば、敢えて試練を与えさせると言う。

流石は鬼の新田。つまりは自分でどうにかしろ、と言う事。

そんな薄情な、と秋斗は視線で抗議するが、鼻から見向きもしていない相手に通ずる筈も無い。

「――――っ」

思考回路はもはや混乱の極み。これが漫画であれば間違いなく、彼の顔は目の部分が渦巻いた描写で描かれているだろう。

やけになった秋斗はそんな頭で不意に思い付いた事を行動に移す。

上体をやや前に傾け、腹部の少女を刺激しない様、且つ包み込む様にして抱き返した。

その間、少女は一瞬ピクリと反応したが、それだけだった。

「…ぐすっ……ひぐっ……」

「……はぁ…」

結局何があったのか、秋斗のその疑問は今後も解決する事は無かった。

突然の来訪者に対し、数えて四つの視線が向けられる。

その内の二つが異常に殺気立ち、何故か頭部が特にピリピリする様な感覚を覚える。

今でこそ一日の殆どを椅子に腰掛けた生活を送っているが、一応これでも数々の修羅場を潜り抜けて来た経験は有る。そこらの殺気程度なら軽く流せる。

だがこの殺気はマズイ。老いた影響で新陳代謝も悪くなったにも

関わらず、身体中の皮膚から汗が吹き出すのを近右衛門は感じていた。

「……儂、何か間違ったかのう…？」

恐る恐る、部屋の隅に佇んでいるタカミチに問い掛ける。

返答は苦笑。実際、特定の誰かが悪い訳では無いのだからその反応は当然だった。

「タイミングが…多少…」

だがこの場合、責められるのは間違い無く近右衛門だ。責任問題ともなれば確実に無実である事は証明出来るが、当事者達がその場その場でそんな事をする訳が無い。

近右衛門は己の不幸を呪った。

「…何の用だ、じじい」

「邪魔」

余りに杜撰な扱いに涙が出そうだったが、今は自らが果たすべき責務を優先しなければならない。

ゴホン、と咳払いをして気を取り直し、今回の件に関わった人物に正面から向き合う。

「取り敢えず本題に移るぞい、切干君…じゃったかの」

「…はい」

「知っているじゃろうが、儂がこの麻帆良学園学園長、近衛近右衛門じゃ」

「切干秋斗です。宜しくお願いします」

礼には礼を。秋斗は毅然とした態度で挨拶をし、丁寧に頭を下げた。

先程の件のせいか、近右衛門は彼の真面目な対応に密かに感動していたりする。

「こちらもの。さて、何処から話すべきか…」

だがそれをおくびにも出さずに淡々と呟く。

対する秋斗は些か緊張の面持ちで次の言葉を待った。

この二人は互いの事を人づてには知っている。そして今回が初対面だ。

この巨大な麻帆良学園の学園長を務める近右衛門に対し、秋斗はその噂に違わぬ頭部に感心すると共に、内心では緊張の余りガチガチに固まっていた。

その一方で近右衛門側もそれと同じだった。一般人が出せる筈の無い存在感を放つ秋斗を警戒しながら、読心魔法が何故かレジストされる事に焦っていた。

魔法使い達は魔法を目撃したりその存在を知った一般人をその場で記憶を弄り、その事実を忘れさせるのが基本だ。

だが場合によってはそれも出来ない時もある。近右衛門はその時に初めて直接動く。

彼のやり方としてはまず、魔法を知った当事者と対面し、無拍子に読心魔法を行使しながら語り合う。そしてその中で当事者の心の在り方を見極めるのだ。近右衛門は今回はそれが通用しない事に不満を覚えていた。

近右衛門は狸である。物事を進める場合、表面上は下手に出ているかに見せて、実は自分側が絶対的に優位な立場であり、損失が少なく且つ見返りが大きくなる様に目論む傾向が殆どだ。

簡潔に言えば近右衛門の考えには常に裏が有る、と言う事だ。確かに悪い人種では無いし、組織の長としての考え方としては正解なのだろう。事実、純粋な善意のみで誰かを助けた例は片手で数える程度ならばある。

周囲からの信用は無いが信頼はされている辺り、一応は善人の括りに含まれているのだろう。

「切干君」

「はい」

「今から話す事は全て事実じゃ。それ聞いてから選択して欲しい。今後、儂等の居る世界に関わるか否かを…」

流石の秋斗でも何を考えているのかを読めない表情で、近右衛門は言った。

――それから語られたのは非常識極まりない話。魔法使い、その発祥地の世界の存在、この麻帆良学園都市の秘密。

秋斗は以前から何となく違和感を感じてはいたが、これ程規模が大きかったとは思わなかった。

案外あっさり信じている様に感じるかもしれないが、極め付けとなっているのがあの鬼達の存在だ。リーダーの赤鬼も喚ばれた云々言っていたし、有り得ない事象も直に見た。信じる他無い。

「君を襲った異形達もその関西の敵対勢力の差し金じゃ。これも手が回らなかった儂等の責任、重ね重ね済まなかった…」

近右衛門はいつの間にか用意されていた椅子に腰掛けたまま、深々と頭を下げた。

「いえ、頭をお上げになって下さい。貴方が全て悪い訳ではありませんから」

目上の人間に頭を下げられるのが苦手な秋斗は直ぐにそれを止めさせた。

寧ろ逆にあの鬼達を退けた後に現れた黒幕的な男を痛め付け過ぎた事を謝りたい気分であった。

――それに先程から近右衛門の纏う空気に妙な違和感を感じ始めていたのも一番の理由だ。以前も何回か経験した事がある――非常にタチの悪い老獪な雰囲気を。

「…申し訳無い」

秋斗のその勘は紛れも無く正解。近右衛門は先程からの彼の態度、対応の仕方から大体の性格を把握し終っており、今正に自分達に利を齎すには如何にすべきかを考慮し始めていたのだ。

秋斗が常日頃から周囲に気を配る生活を送っていた御蔭で培ったスキル、人の本質を見る能力が無ければ判らなかっただろう。

「取り敢えず現状は理解しました」

「ふむ、それで君はどうしたいかね？望むなら記憶を消す事も出来るんじゃが…」

近右衛門は控えめな声で提案する。

その声を聞いた瞬間、秋斗はその真意を悟り、苦笑した。

いきなり笑みを浮かべた事に内心で頭を傾げた近右衛門だったが、まあ確実に自分の思惑は通るだろうといった確個たる自信がある為か、全く揺るがない。

「いえ、それは遠慮します。その代わりに――」

秋斗は言葉を一端区切ると、タカミチとエヴァをチラ見する。

視線を当てられた二人は、彼が何を考えているのかを一瞬で理解し、ニヤリと笑い返した。

「魔法関係には積極的に関わりません。基本は貴方に護ってもらいたいと思います」

「……は…儂？」

「はい。頼りにしてますよ、大魔法使いさん？」

この時初めて近右衛門は悟った。眼前の男には自分の企みなど既に看破されていた事を。

彼が極度のお人よしで腕も立つのは理解している。故に初めは低姿勢で接して好印象を与え、あれやこれやと理由を付けて警備員の真似事でも頼もうかと考えていた。

だが逆に利用しようとしてくるとは余りに予想外。読心魔法は相変わらず通用せず、粗を探そうにも出来ない。

「そ…それは困るのぅ。儂はこれでも組織の長を務めておって忙しいんじゃ。代役なら出せるが…」

「話していて解りました、貴方が一番信用出来ます。他は駄目です。タカミチは出張ばかりだし、エヴァや他の関係者達は前線にいなければキツイでしょう」

信用など微塵もしておらんだろうに、と近右衛門は内心毒づく。

実際にそう見られても可笑しく無い事をしている自覚は本人にもあったが、露骨過ぎる言い回しに対してその程度の怒りは覚えていたと見えるだろう。

「そ…それに魔法の存在を知りながら関わる事だけを避けると言うのはのぅ…」

「知っている事と関わる事は違うでしょうに」

何とか反論するも、即座に切り返される。

確かに魔法使い側が努力すればそれは可能だ。魔法の秘匿は基本であるが、実際はそれ程厳しく無い。本人が妙な真似をしない限り、知ったままでも問題は無いのだ。

無論、彼にその関係を近付けない様にする労力は必要となるが。

極論を言ってしまえば、相手は所詮一般人であり、問答無用で記憶を消してしまえばその様な手間は省ける。

なのだが、今回は対象と親しい魔法関係者が三人もおり、今正に証人として立ち会っている。そんな事が出来る筈無い。

「……儂、年寄りじゃし…」

「魔力とやらがあればどうにかなるでしょう？」

老人虐待に聞こえるが、麻帆良最強の魔法使いである近右衛門なら造作も無いのも事実だった。

秋斗自身も多少は良心が嗜めたが、恐らく今までに何人も利用してきたであろう狸爺にはそろそろ罰を与えるべきだとし、心を鬼にした。

「…そこまでする権利はこちらには…」

「ぬ、身体中が痛み始めたな…」

「アキト、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だよアスナ」

「……」

人の善意に託けて利用しようとした事に対する制裁なのか。ああ言えばこう言い、頑なに譲ろうとしない秋斗に、近右衛門は泣き出したくなった。

――結局、近右衛門は緊急時には必ず直ぐに切干雑貨店に向かうという契約を泣く泣く結び、今回の行動を深く反省したそうな。

その際、証人である三人はこうコメントを残している。

「良い薬になったんじゃないかな？」

「天罰」

「同情など出来ん、自業自得だ」

ちなみに三人は微妙に笑顔だったらしい。

、

第伍話　信用と罰（後書き）

ストーリー性が皆無なこの作品ですが、完結までのプロットはしっかり有ります。最後までしっかり書くつもりです。

そして最終話と第零・壱話付近を読み比べ、どれぐらい文章が変化したのかを調べてみたいです。それが楽しみです。

それと一言だけ言わせて下さい。

ＧＴＮ（グレオドーチャー）（新田）！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5330w/

ありがちPrologue、またの名をテンプレ話

2011年10月29日02時13分発行